386
239

大田黑元雄譯著

微笑と嘲笑

第二譯著集

音樂と文學社發行
一九二〇年

始

386-239

大田黑元雄

第二譯著集

微笑と嘲笑

東京大森

音樂と文學社藏版

千九百二十年

大正
9. 4. 30
內交

To

KAZ-É TANABÉ

自序

此の集に聚められた諸篇は、題名の示して居る通り、微笑と嘲笑とに彩られて居る。私は此の集を主としてジェラルド・カムバーランドのものの飜譯に宛てた。カムバーランドに就て私は委しい事を知らないが、彼がマンチェスターの人である事と、若い時から記者生活を送つて來た人である事とは疑ひもない。私の今度譯したものは總べて彼の近著"Set Down in Malice"の中に藏められたもので、彼自身其

の卷頭に斷はつて居る通り、大部分彼が今度の大戰に從軍して、希臘やセルヴィアに過した塹濠生活の單調と退屈とを紛らすために書かれたものだ。從つてこれには事實の上の不正確は發見される。それから此等に現はれた彼は明らかに naughty 過ぎるくらゐ naughty だ。けれども私は彼の鋭敏なまた機智に豐かな觀察力と其の巧みな表現とに感服を禁じ得ない。實際彼はよく嘲笑すべきものを嘲笑し、敬服すべきものに敬服して居る。彼の嘲笑は寧ろ私を微笑させる。彼は確かに異常な批評眼を有する人だ。

私自身の二篇に就ては云ふべきところもない。唯、先頃またシャリアピンの訃報を英國の音樂雜誌に發見したので、私は此れの訛傳である事を望んで居る。

千九百二十年三月

東京大森

大田黑元雄

目次

ジェラルド・カムバーランド
音樂批評家……三
二人の洋琴家……一五
ドゥ・バハマン——エミル・ザウアー
會堂音樂祭……二三
伯林と其の或る人々……四八
二人の管絃樂指揮者……七七
サー・トーマス・ビイチャム——ランドン・ローナルド
三人の英國作曲家……

グランヴィル・バントック――ジョセフ・ホルブルック――二
シリル・スコット
大田黒元雄
シャリアピン……一〇五
アイクハイムと語る……一二九

微笑と嘲笑

第二譯著集

ジェラルド　カムバーランド

GERALD CUMBERLAND

gerald

音樂批評家

極く近年迄、倫敦乃至地方の新聞で音樂批評は眞面目に取扱はれて居なかつた。ワーグナーが倫敦に來た千八百六十年代のあの昔の時代には（僕は書籍から何哩も離れて此れを書いて居るのだが、ワーグナーの英國に來たのは、たしかに六十年代だつたらう？）英國の新聞に唯一人の僻見のない音樂批評家も居なかつた。「タイムス」の非常に有力な批評家だつたジェー・ダブリュー・デヴィスンは馬鹿だつたのみならず、もつと危險な事には、學問のある馬鹿だつた。彼は言語同斷にワーグナーを取扱つた。そして他の諸外國民中の敎養ある人々の間に、我が英國を音樂的に不評判ならしめるに餘りある事をした。「デーリー・テレグラフ」のジョセフ・ベンネットは、アーネスト・ニューマンやアール・エー・ストレットフェイルドやサミュエル・ラングフォードのや

うな人が二行程で云へる事を一段掛つても云へなかつた流暢な書き手だつた。彼は多年の間、陽氣に下らない事を書き、非常な勢力を握つた。而かも彼は英國に於ける音樂の問題を進歩させる事には全然何もしなかつた。

商賣上の資本として、ジョセフ・ベンネットは「デーリー・テレグラフ」の所有者には非常に大切だつたに相違ない。それは、デヴィスンのやうに、彼が多大の影響を人に與へたからだ。人々は彼を讀んだ。僕の時代にさへ、重要な新作が發表されると、我我は互ひにかうたづねるのを例とした。――『ベンネットは何と云つてる?』 そして最も不幸な事に、音樂に就て深く知つて居るものは誰も十中九までベンネットの間違つて居るのを常とした事をよく知つて居たけれど、彼の云つた事は、一般には極く重要視された。若し彼が一つの作品を駄目だと云つたら――そら、其の作はまさに駄目にされてしまつたのだ。彼に十倍する才能を持つ音樂に關する書き手は尠くも二十人ぐらゐ居るけれど、今日如何なる音樂批評家も彼の握つて居たやうな勢力を持つて居

るものはない。例へば、彼の目下の後繼者ロビン・レッグ氏はベンネットとは比較に成らない程見事な音樂家で、もつとずつと僻見のない人で、且つまたもつと遙かに敎養のある研究家だ。而かも、彼の影響は、其の前任者のもの程廣大ではないと僕は想像する。ベンネットが公衆の程度に身を低めたのだと云ふ事は出來ない。それはベンネットがさうする事が出來なかつたからだ。若しさうしたとしたら、彼はまるで姿を消してしまつたらう。いや、彼は公衆、民衆、一般の人々だつたのだ。彼は裏町の人の見解を持つて居た。

然し、現在は樣子が違つた。音樂批評家はもう談話家や、雜談家や、贅辯家ではない。通常、彼は、敎養、經驗、竝びに堅固な音樂知識を持つた人だ。彼は少ししか稼がない――極く稀な場合にはもつと拂はれる事のあるのは疑ひもない事だが先づ一年百五十磅から五百磅見當だ。それだから音樂批評は野心家を誘惑する職業ではない。何故なら、物質的目的を持つ野心家は、擬ひの寶石を賣るとか乃至は金儲けをする連中の

する事を何でもして、新聞の俸給の三倍ぐらゐはもつと樂々と稼げるだらうから。現に「デーリー・ニュース」の演劇批評家であるイー・エー・ボーンが二十年以上も前に「ミュージカル・スタンダード」を編輯して居た頃、彼は其の俸給のあまりに尠い點から、音樂批評家に成らないやうにと僕に頻りに希望した非常に眞面目な手紙を呉れた。『若し君が會社に位置を持つて居るならそれに嚙りついて居ろ。又若し君が旅商人なら、いつ迄も旅商人で居ろ』といふのが、彼の忠告の要點だつた。けれど僕は年に一萬五千磅儲ける株屋より年に百五十磅の音樂批評家の方に寧ろ成りたかつた。僕は金が好きだ。けれど金より音樂や新聞の仕事の方がもつと好きだ。そして年に三百磅の收入でマンチェスターに過した三年は、幸福に滿ち、自分の心が生長し、精神が天翔るやうに感じた偉大な日に富んで居た。

イー・エー・ボーンは、ほんたうの意味での音樂家ではなく、またそれを彼が要求しもしないと僕は思ふ。けれど僕の想像に依れば、音樂好きで、書く事に熱望を抱い

て居たため、彼は提出された最初の記者の仕事を引受けたのだ。それが「ミュージカル・スタンダード」の編輯だつた。次いで、彼は音樂批評家として「モーニング・リーダー」に赴き、それから演劇批評家として「デーリー・ニュース」に轉じた。彼は健全で、しつかりした頭を持ち、正直だけれども、目立つて華やかではない。高い標準から判斷されると、彼の音樂上の作物は貧弱だつた。彼は新しい問題に面した時正當な判斷に自身を導く充分な知識を持つて居なかつた。フーゴ・ウォルフはそんな問題だつた。そして今若しボーンが、凡そ十五年程前に其のフーゴ・ウォルフに就て書いたところを讀むとしたら、彼は到底恥かしさに堪え得ない筈だと思はれる。

演劇批評家として彼は名譽あるまた羨望さるべき地位を獲た。僕は非常に屢々、初日の晩に彼に逢ふのを常とした。そしていつでも彼を稍遊び疲れて居るやうに、また殆んどまつたく想像力と微妙なところと眞の藝術的感情とを缺いて居ると考へた。彼は人生に對して藝術家の態度を持つて居ない。そして若しそれを持つて居ると君が云

つたなら、彼は君に對して恐らく誹謗の訴へを起したらう。

* * * * * *

僕は「スペクテーター」の音樂批評家で、有名な滑稽作家であるシー・エル・グレーヴスに一度も紹介されなかつた。けれど一度僕は或る大變重要な演奏會の際、其の隣りに座つた。そして話の中に、彼が極端に丁寧な、けれど寧ろ要領を得ない人だといふ事を發見した。彼の音樂上の知識は敎養ある素人のものだ。彼の心は嫌々「進んだ」作品を是認する。そして近代人としての僕は、あれ程氣持よくあれ程丁寧なまたあれ程才能ある智惠者が其の心的地平線の外側に全然在る作品に就て、たとへ時々でも判斷を下す事に時を費させられるのを遺憾とする。けれども、ブリューアー博士、ティー・エッチ・ノーブル氏、サー・ヒューバート・パリイ、サー・チャールス・ヴィリアース・スタンフォード及びサー・アレキサンダー・マッケンジーが規則正しくまた贊成の意を以てグレーヴスの批評を讀むと想像するものの、僕は「スペクテーター」が倫

敎の音樂生活に何等かの影響があるかといふ事に就ては非常に疑ふものだ。

* * * * * *

けれども、音樂に就て書く我々の總べてが最も尊敬するのは「バーミンガム・デーリー・ポスト」のアーネスト・ニューマンだ。ここに我々は絶對の確かさと殆んど恐ろしい速さとを以て働いて居る一等級の理智を持つ。學者として彼程蘊蓄のあるものはなく、筆の人として彼は最高位に在る。そして其の物に恐れない事と、其の剛直な理智的正直に對しては、比疇を見ない。彼のワーグナー及びフーゴ・ウォルフに關する書物と「ミュージカル・スタディース」と題された一卷とは英語で今迄出版された音樂批評の如何なる書物よりも全然圖抜けて傑れて居る。而かも彼の音樂の知識は百科全書的だが、音樂は僅かに彼の權威である多くの科目の一つに過ぎない。變名を以て彼は其の出現と共に大評判のやうな或る物を作り出した哲學に關する著書を出版した。不幸にして、此の本は發行後數週間で絶版に成つてしまつた。詩、佛蘭西竝びに獨逸の

文學、社會學及び心理學は彼が音樂に就てと同樣に書く能力を持つて居る科目の幾つにしか過ぎないのだ。

何故彼はバーミンガムに隱れて居るのか？それはかうだ。若し君が倫敦での音樂批評家なら、何も纏まつた仕事をする事は不可能だ。終日、また殆んど毎日君は演奏會や歌劇に行く。そして君は悲しくも單なる報道者と成る危險に陷る。ニューマンのバーミンガムでの地位は、彼にもつと大切な作を書く幾らかの閑を與へる。

僕はいつも彼がいつか其の最も望んで居る作を成就する機會を與へられるだらうかどうかと思はずにニューマンの事を考へない事はない。其の作といふのは充分に完備した音樂史だ。此の仕事のために、彼は理智的には充分準備されて居る。けれどそれには何年かの閑が必要だ。度々彼は作の計畫をした――特にモンタイヌに關する本――そしてそれは閑の不足から棄去るやうに强ひられた。彼は新聞のそれよりもつと立派な仕事のために作られたのだ。そして彼がそれこれの國々で音樂思想の上に消し難い印象をとどめたにせよ、その後半が日々の批評及び時々の記事を書く事に費されなくては成らないなら、彼の生涯は大變無駄にされるわけだ。

ニューマンの心理は奇妙に複雜だ。彼には慘酷な氣質があるけれど、而かも猶彼は他人の苦みに就て敏感だ。僕はバントックが彼に其の（ニューマンの）或る敵が死んだばかりだといふ事を話した或る場合に彼と同席して居た、此の知らせのニューマンに與へた效果は僕に最も意外なものだつた。彼はすこしビクッとした。『あゝ、あゝ、可哀想に』と彼は云つた。そして其の晩、彼は其れから後ずつと沈んで默つて座つて居た。死を思考する事は彼に堪え難い。彼のそれを嫌ふ事は肉體的であると同樣に神經的だ。剛直な苛酷な批評家だが、時として、彼は自身の批評に對して病的に反動する。彼は神經過敏で、想像力に富み、合理的だ。彼は殆んど信用せず、全然信賴しない。そして非常に愛し、激烈に憎む。彼はまた空しくもある。そして彼は殆んど絕望的に其の青春の殘りに嚙りつく。

僕が極く親しくニューマンに逢ふのは數年前からの事だ。けれど彼が「マンチェスター・ガーディアン」の編輯局に居り、後、バーミンガムに移つた頃、僕は非常に屢々其の家を訪ねた。そして極く僅かな友人の集まりが愉快な馬鹿騒ぎに長い夜を過したものだつた。其の當時、ニューマンは其の年齢から二十五年を投げ棄てて、元氣ないたづら小僧に成る事が出來た。僕は或る晩、氣味惡い情調、いや寧ろ非常に調子づいた氣分に我々が成つて居た時、仲間の一人である或る婦人が急病に罹つて死ぬ眞似をした事を覺えて居る。其の時、我々は彼女に死の裝束を着け、其の眼の上にペニイの銅貨を、また其の頭と足に蠟燭を置いた。ところが此の冗談の途中でニューマンは姿を消した。そしてそれがすつかり濟んで、彼が座に戻つて來た時、彼は陰氣な樣子だつた。それは我々が人生の恐ろしい事實を戯れにしたために、心を亂されまた惱まされたのではなくて、我々が識らず識らず彼の忘れたがつて居た或る物を思ひ出させる事で、彼の萎縮して居る心に切り込み、そしてそれを傷けたからだつた。發狂も同樣

な激烈な調子で彼を嫌がらせた。そして彼を親しく知つて居た者は皆、彼がフーゴ・ウォルフの本を書いて居た時、ウォルフの歪んだまた毒された心理が彼の心を奪ひ、此れを司配した事を記憶するだらう。

けれど、度々、ニューマンは我々にバントックの「フェリシュターの幻想」ウォルフの「メリケ歌曲」其の他のやうな近代の歌曲を聽かせて一夕を過したものだ。僕は今其の怜悧な寧ろ沈鬱な顏が非常に生き生きとして、彼がシュトラウスの「英雄の生涯」に就て說明し、如何に其の中のハープの音樂が或る秘密に彩られた織物にそそがれた酒のやうに、怪しくも全曲の結構を汚して居るかを我々に語つて居る有樣をありありと思ひ浮べる事が出來る。其等の宵々は僕に取つて生涯での最も大切なものだ。僕は如何に僕と僕の妻とが、鼻に若芽の匂ひを嗅ぎ、ニューマンの聲をまだ耳に聞きながら、また嘗て味はつた事のなかつた幸福に似たもので氣持よく搔き亂された心を持ちながら、春の夜更けを長い並木路を通つて家に歸つたかを記憶する。

さういふ日はもう永久に去つた。回復された青春の日、宵であつたがために浪漫的だつた宵々、靜寂のうちに、人が長く長く夢み、肉體は深く無感覺のうちに沈み、魂は空を彷徨し飛翔し、そして夜が明けると、その住家へ玄妙に變化されまた無限に活氣づけられて戻つた夜々は……

ニューマンは僕のために一つの世界を開いて呉れた。彼が居なかつたなら、僕は決してそれを見たらうとは思はない。いや、まつたく、僕はその世界の存在をいつまで經つても氣づかなかつた事だらう。

二人の洋琴家

ドゥ・パハマン――エミル・ザウアー

ウラディミル　ドゥ　パハマン

恐らく、現在、世界での最も絶妙なまた最も脆いものはウラディミル・ドゥ・パハマンのショパンの演奏だ。十五年以上も文章家は彼の彩られた音樂を彩られた言葉に再現しようと試みて來た。そして彼等は皆失敗した。ドゥ・パハマンは異國の產物、また溫室の植物だ。それは多くの他の植物の裡にある溫室の植物ではなくて、嬌奢にまた孤獨に而かも誇張された自覺を以てそれ自身の溫室の中に住んで居る植物だ。

彼の事を考へると、彼が文明の進步の極く最後の刻に屬して居る事が感じられる。過去の總べての文明は幾去來した。それは倦まざる勤勉を以て長い年月を働いた。幾

千年の間に人類は努力して高く上つては、眞逆さまに落下した。多くの都は奪掠され、多くの國々は荒廢に委した。バビロン、ニネヴェー、アテネ及び羅馬は誇りげに花咲いて、最も悲慘に凋落した。そして總べての此の苦惱、總べての此の想像し難い勞働に依つて產まれたものが、ドゥ・バハマンの演奏なのだ。世界は何千年の間苦んだ。そして到頭此のレースよりも纖細で、陶器よりも毀れ易く、黃金よりも更に燦然たる……ものを我々に與へた。

此の洋琴家の奇矯な態度に就ては可成り困つた問題がある。ドゥ・バハマン自身其れを絕えず公衆に見せつけるのだから、誰もそれに就て公然と論じる事が出來る。諸君は僕の指して居る事を御存じだらう。それは彼が殆んどいつでも其の彈く曲に就てのみならず、其の彈き方に就てする、言葉、身振り、點頭、微笑竝びに橫目などの走るやうな說明だ。僕は此の最も異常な振舞ひが單なる街氣だと信じる事を拒む。それは僕には其の人の精神其のものの直接な抑へ難い表情だと思はれる。それは實に眞摯で

實に自然だから、馬鹿らしくない。けれどもそれは全然、無效果だ。それは何の助けにも成らない。寧ろそれは害をする。云はば特別にいみじい色あひを得たといふやうな時に、君の方にわるごすく目くばせする演奏家を見る事は、其の色あひに、より微妙な匂ひを與へはしない。それは唯注意を亂して、演奏家の胸中にほんたうはどんな事が起つて居るのかと人に揣摩させるだけの事だ。僕には其の洋琴家がかう云つて居たやうな氣がした。――『氣がお注きでしたらうなあ？時に、あなたには一生掛つてもそれがお出來ではないでせうが、私は何と雜作なくやつたでせう！』

緩んだ口とくるくる動く眼を持つた其の大きな滑かな顏はお伽噺の本の中から出て來た魔法使ひの顏だ。それはほんたうの顏ではない。それは力の屬性のたつた一つを持つて居る。それは主我だ。主我はその容貌のどの皺をも刻んだ。それは其の眼を大きく見開かせる。主我は其の感じの鋭い指に流れて居る。僕は彼の傍に立つて、つとめて音樂を聽くまいとし、そして彼の顏を注視した。然し僕は何も學ばなかつた。僕

は彼の心がすべての情緒に離れて住んで居、また彼の理智が――さうらしく思はれる通りに――自働的に作用して居るのかどうか知らないし、乃至は年功と皮肉とに富んだ彼が其の精神の精髄を音の中に投ずる力を持ち、それをしながら自身並びに我々に對して――自身は欺かれないのに我々は欺かれるので自分自身に對してより我々に對してより多く――嘲つて居るのかどうかを知らない。

あわも異國的な人格が、堅固な、弛まない人氣を公衆の上に持つて居るといふ事は奇體だ。彼は俗衆の鑑賞し得ないものだ。ヴィリエル・ドゥ・リイル・アダムは少數の人に崇拜される。ウォルター・ペーターは千人の眞摯な弟子しか持ち得ない。處がドゥ・バハマンは幾百萬の人々から崇められる。「幾百萬」は誇張でない。彼の演奏して居るうちに人々は我れを忘れてしまふ。諸君は十五年前、亞米利加でパデレフスキイ熱の盛んだつた時、毎晩毎晩社交界の婦人達に演奏臺が襲擊されて占領された事を覺えておいでだらう？ 僕はランカシャーの町でのドゥ・バハマンの演奏會で殆んど同樣の事を

目擊した。けれども此の洋琴家は社交界の婦人にではなく、非感情的の銀行の手代や、株屋や、商賣人や、勞働者の男女に襲はれたのだ。演奏會の最後に、彼等は何百といふ數で演奏臺の上に溢れて、洋琴家を取り圍んだ。そして彼は時々空しく微笑しながら而かも著るしく樂みながら、各曲の間に其の崇拜者の輪を洋琴からすこし遠ざけるやうにするのみで禮奏に次ぐに禮奏を以てした。

謎のやうな人間だ、此れは。其の秘密を決して棄て去らないだらうと思はれる人間、いや恐らく、其の秘密を持つて居る事に氣のついて居ない人間だ。

エミル　ザウアー

エミル・ザウアーは燦爛たる彈き振りを持つて居る。そして十五年前には、「貪慾な」といふ語以外には正確に形容し兼ねる技巧を持つて居た。僕は其の頃十八九の青年だつたが、殆んど二十年程も前にマンチェスターで彼の催した洋琴演奏會は僕の始めて

行つた演奏會だつた。其の時の樣子は當時最も浪漫的のやうに思はれたし、現に今でも思はれる。家庭の小さい洋琴で僕の兄の一人が僕を唯一の聽き手として演奏會を催し、それの挨拶として次ぎの晩僕が演奏したのはほんたうだ。然し、我々は此等の事柄を非常に眞劍に取扱つて、お互ひの彈き方に就て長い批評を書きさへしたが、我々の演奏は高級のものではなかつた。ところが、一夕、兩親の言葉に叛いて、目玉を受ける危險を冒しながら我々は人知れず家を忍び出し、そしてザウアーを聽きに行つた。

僕は我々が年にしては若かつたに相違ないと思ふ。——たしかに我々は今日の十八九歳の通常の敎育ある靑年に比べると、ずつと若かつた——そして偉人の出場を待ちながらフリー・トレード・ホールのギャレリイに座つた時、我々は非常に興奮した狀態にあつた。彼の瘠形でそして——其の時思はれたところでは——精神のやうな姿が洋琴へと演奏臺を橫切つた。そして尠くとも二人の聽き手に取つて二時間の恍惚たる悅びが始まつた。僕も兄も過去の大洋琴家に就て知らるべき事は總べて知つて居た。そして屢々我々は彼等の彈き方がどのやうなものかを想像して居た。けれども二人共、今現に聽いたもの程素晴らしいものが有り得ようとは想像して居なかつた。此の一度だけ、實現が豫期より數倍も見事だつた、ただ、一つの事が僕の完全な幸福を亂した。そしてそれは實際のところ洋琴家は盛んな喝采を受けて居たのだが、彼が其の受けつつある喝采の量に失望しはしまいかといふ考へだつた。そこで僕は出來るだけ强く且つ長く手を叩き、また床を踏み鳴らした。「アッパショナータ・ソナタ」は殆んど僕を亂心させ、そしてリストのラプソディーは强烈な酒のやうだつた。

けれども、すべての美しい物は終焉を告げる。そして十時近く、僕の兄と僕とは非常に興奮して而かも同時にザウアーの歡迎に對して我々がかくあるべきだと思つたところのすべてをするのに我々が全力を盡して居たかどうかを覺束なく感じながら、場外の濡れた鋪道の上に立つた。

『樂屋口の外で待つてて、あの人の出て來た時に喝采しようぢやないか』と僕の兄は

云ひ出した。

暗い横町で、乘ると直ぐに動き出した馬車の中に、彼が身輕に入つた時、ザウアーにはあの二つの聲の喝采が非常に奇妙に響いたに相違ない。我々の聲が消え去つた時、彼は窓を開け、其の長い指を持つた手を我々の方に差出しながら、身體を乘り出した。彼の方へ熱心に走り寄つて、我々は交る交る彼の手を握つた。そして、彼の我々に叫んだ禮の言葉を吃驚して聞いた。

それから後長い間、ザウアーは我々の最も崇拜する人物の一人だつた。そして我々は至大な興味と興奮とを以て英國と大陸との兩方で彼の大成功に隨つた。我々が大洋琴家と握手した事を友達に自慢した時、彼は其の事柄に餘り興味を示さなかつた。そして一人の俗物は叫んだ。『なんだ、そんな事は何でもないや。此の前の土曜の午過ぎに俺はジム・ヴァレンタインの上衣の袖に觸つたぜ。』ところで、ジム・ヴァレンタインは名高い田舍音樂師だつた。

會堂音樂祭

いや、僕は此の章で年代記の作者にならうとするのではない。此れが面白味のない題材のやうに耳に響くのは承知の前だ。けれど、澄んだ九月の日にグロウスター、ヘレフォード、及びウスターなどで、無暗に面白い、しかも新聞に載せられなかつた澤山の事が起つた。そして僕が諸君に御話ししようとするのは此等の事に就てなのだ。

毎年秋の始めに、此等の會堂の一つに行つて、サイダーを飲み、日に六時間音樂を聽き、川のほとりを散歩し、夜に成るとホテルで愉快な馬鹿騷ぎをやり、そして一週間乃至十日の後、また家に歸るのは大變たのしいものだつた。九月は疲れた月だ。僕はいつもさう思ふ……若し疲れたのでなければ、稍物憂いのだ。それは生きて居る事を悅びながら、ただ靜かに散歩したいと思ふやうな多くの日を持つて居る。こんな日に

騒ぎ立てたりほんたうに一生懸命に仕事をしたりするのは飛んだ事だらう。僕がああも幸福な幾週間を過したウスター、リンカーン、グロウスター、ヘレフォード、ノリッヂなどといふ此等の素敵なところでは、人々が始終默想しまた草を喰ふやうな氣がされる。確かに僕は九月の日に彼等が群を成して草を喰つて居るのを見た。僕はまた或る時へレフォードの僧正が草を喰つて居るのを眺めた。彼は完くぢつと立つて居た。そして勢の良い金蓮花の發育に就て沈思し、判斷し、また物靜かに不思議がつて居るやうだつた。

此等の音樂祭には誰も移住して來るのだつた。それは、誰もと云つてはいけないかも知れないが……けれど諸君は僕のつもりを御存じだ。それは諸君がまた逢つて一しよに音樂を聽いたり話したりしたいと非常に欲するやうな其の人達、卽ちグランヴィル・バントック、アーネスト・ニューマン、サミュエル・ラングフォード、ジョン・コーツ、マクノート博士、フレデリック・オウスティン、ハーバート・ヒュースといふやう

な人達だ。

倫敦はいつでも三十人乃至四十人の批評家を、地方はまた同じくらゐの數を派遣した。そして近所の町々からは地方的の家族達、音樂上の時勢に遲れまいと努める中流階級の家族達(可哀想な欺された人達!)いつ迄經つてもメンデルスゾーンの憐れな年寄りの「イライジャー」に我れを忘れる未婚のレディー達、合唱法に就て考へを持つて居る恐ろしい合唱長達、ドクター・ブリューワーが最後の大家だと心から信じて居る村の風琴家達、審美熱とエルガーの「ジェロンティウスの夢」に對する著るしい愛好とを持つ初心な青年達、家庭にある時はヴァイオリンを彈く非常にきれいなお孃さん達、そして、一番しまひに、副監督達(ディーン)、(さうだ、澤山の副監督達)僧會員補助達(ティナーカノン)、細そりした牧師補達(キューレート)、總べての種類の牧師達、金のない田舍紳士達、地面持ちの坊さん達を流れ込ませたものだつた。

我々、音樂批評家に取つて、此等の音樂祭を、其等が我々に豫期する程充分眞面目

に取扱ふ事はむづかしかつた。それはヘンデルの「メサイアー」の合唱がグロウスターのやうな小さな町でどんなに歌はれたかと云ふ事を、倫敦、バーミンガム若しくはグラスゴウのやうなところの人が知りたがるわけがあらうとはいつも我々に考へ得られなかつたからだ。そればかりではなく、我々の多くは此等の長年續いて居る音樂祭の悲慘な眞面目さに可笑しがらされた。此等の音樂祭では規則として、僅か二つの多少共重要な新作が演出され、其の上には古いオラトリオ——藝術上の以ての外の形式だ——が重たい雲のやうに掛つて居た。そこで我々はいろいろ違つた方法で愉快を求めた。そして我々の時々の馬鹿騷ぎの隊長はいつでもグランヴィル・バントックとアーネスト・ニューマンなのを常とした。

此等の愉快な出來事の一つは其の殆んど些細な點まで、僕の記憶の中を低徊して居る。我々全體中の古參者、經驗に富んだ批評家、機智に豐かな辯舌家であり、最も學識ある音樂家だつたマクノート博士がいやいやではない犧牲だつた。バントック、若

しくはすつかり肩書附きで呼べば、プロフェッサー・グランヴィル・バントック・エム・エーは槽の中に入れてバーミンガムから二匹の生きた鰻を持つて來て居たのだ。彼が此の強い生物を持つて來た折には、其の心に何か愉快な考へがあつたに相違ない。そしてヘレフォードの街で(僕はそれがヘレフォードだつたと思ふ)音樂祭の第一日の朝のうちに彼に逢つた時、彼は二匹の生きた鰻で爲し得べき僕の考へ得る一番面白い事は何だと尋ねた。

『鰻ですつて！ほんたうに生きた鰻を二匹持つて居ると仰有るんですか？』と吃驚して僕は叫んだ。

『うむ、此のヘレフォードに。すこし經つとこぢやあちよつと退屈に成るからね。それに兎に角鰻は馬鹿に活潑な奴だ。それは生活の單調を破るよ』彼はかう云つて一寸の間言葉を切つたが、『さうして』と寧ろ夢みるやうにつけ加へた。

『實に尻尾を忙がしく振るね、僕は鰻の尻尾を世の中で一番忙がしいものぢやないか

と思ふ。來て、のぞいて見たまへ。ホテルの僕の部屋にあるんだ」

そして、其等はそこに槽の中に居た。それは莫大な熱心を以てぐるぐる泳ぎ廻る暗い水の中の暗い物體だつた。

其の日が過ぎた。それでも僕には名案が浮ばなかつた。バントックは其の夕方會堂で其の作品の一つを指揮した。――それは非常に重要な莊重な事件だ。そして我々批評家達が、夫々の社へ打電してもらふやうに原稿を郵便局に屆けてしまつた後、我々はホテルに集まつた。

ところでマクノート博士は友達と夜更けを過すために出掛けて行つてしまつて居た。そして夜中近くまでは歸るまいと豫期された。そこでバントックにも僕にも彼の歸つて來た時吃驚させるために何とかして鰻を使はなくては成らない事が明瞭に成つた。我々はこの惡猾い生物を彼の寢臺の中の手洗鉢の中に入れ、それに水を注いだ上、樣子如何にと上から見つめた。

『充分だ。外の事を考へるには及ばない。聽きたまへ』とバントックが云つた。

そして、事實、最も忍びやかな變手古な物音がした。鰻は柔かい皮膚を持つて居るかも知れない。然し其の筋肉は堅い。そして、其等が鉢の中をぐるぐる廻ると、暗いところで何か兇惡な事をやつて居る人達のさせるやうな、連續した滑らかな音が聞え、且つ、時々思ひがけない折に、鉢の側に其等の一匹が尻尾をぶつけた時に發する大きなピシャリといふ音が聞えた。

ニューマンとフレデリック・オウスティン、並びに他の一二人は我々のもくろみに加擔した。そして女の形が作られて、マクノート博士の枕の眞中に注意深く置かれ、首迄靜かに蒲團で掩はれた。

此等のマクノート博士のなぐさみに對する念の入つた趣向は、博士の歸つて來た時にちやうど完成された。我々は廊下の暗い片隅に隱れて結果を待つた。

五六分經つた後、呼鈴が鳴つて女中が出て來た。

『すこし變だと思ふんだがね、此の部屋は寢室なんだか、物置なんだか、それとも水族館なんだか、實際のところを云つてもらひたいんだがどうだらう』とマクノート博士はおだやかに云つた。

女中は部屋の中に入つた。そして我々は少し經つてから、其の半ば囁やくやうに云つた靜かな聲をちやうど聞き取る事が出來た。

『でも、旦那樣、此のお部屋にはどなたか入つていらつしやいます。旦那樣のお床の中に御婦人の方がおいでで御座いますよ』

勿論、好機が到來して居たのだ。そこで我々はマクノート博士の當惑の證人と成るために其の寢室の中にどやどやと入り込んだ。冗談は續けられた。マクノートは喫煙室へ連れて行かれ、婦人を殺害して其の死體を隱匿した罪を、裁判官や陪審官に嚴かに訊問された後、死刑を宣告された。ニューマンは物置から一挺の斧を持つて來た。そして夜明け間近に成つて、大がかりな無言劇で冗談の死刑が執行された。

『馬鹿に小供つぽい——まるで小學校の生徒みたいだ！』僕は讀者が（勿論君ではないが）輕蔑するやうな口調で云ふのを聞く。さうとも、それは小學校の生徒のやうだつた。そして若し『子供つぽい』を『子供のやうだ』に換へるなら、僕は心からそれに同感する。

*　*　*　*

けれども、我々の時間はかういふ騷がしい有樣ばかりで過されたのではなかつた。そこには談論に過した長い時間があり、彼に面會するといふ事が特權で、親しく交はるといふ事の果報だつた中年の人である「マンチェスター・ガーディアン」のラングフォードの偉大な談話、ニューマンの機智に富み、寧ろ苛酷ではあるものの非常に面白い辯舌、バントックの辛辣な談論、竝びに總べての種類の人々の一般的の雜談などがあつた。

僕はラングフォードと二人で、ちやうど黃葉して居たポプラの茂みの下の小さな田

舍びた食卓に座つて過した或る午後の事を如何にも物悲しく憶えて居る。何故物悲しくといふかと云へば、それは、そのやうな場合が再び起り得ると思へないからだ。ラングフォードの心は寛潤で、最も内容に豐かだつた。どんな事でも直ちに且つ骨を折らずに彼の人生の哲學に適合しないものは生じ得なかつた。そして彼の談話は深遠だつたがそれを聞いて居ると誰も完全に安息を覺える程非常に人間的だつた。彼は何でも受容れる……諸君は多くの人々が自分達の受けたワルト・ホイットマンの人格の影響に就て說述しようとしたのに氣が注いたに相違ないと思ふ。そしてまた諸君は其等の人々がすべて失敗したのを氣注いた事だらう。それは不可能な仕事だ……そして僕はラングフォードに就て書きながら、彼が其の友人達に取つてどんな意味を持つて居たかを諸君に傳へる事が不可能だといふ事を感じる。僕はキャプテン・ジェー・イー・エゲートが或る時『僕はラングフォードと話したあとで、自分を何て阿呆だと感じずに引き退つて來ない事はない』と云つたのを思ひ出す。さうだ、それはほんたうだ。で

も、それと同時に君は、自分の阿呆さを諦める事を感じる。その外に、君は若し自分が阿呆ならラングフォードが話などをしつこないと云ふ事をよく知つて居る。彼はきまつて君に酒をすすめ、それから卷煙草を君のために探さうとしてチョッキのポケットを無器用にさぐるのだつた。

ラングフォードは世俗的の意味で永久に成功しないだらう。恐らく彼は成功を疑ひの眼で眺める。彼はそれを獲ようと試みた事がたしかに一度もなかつた。僕は彼の天性をエー・イーのそれに酷似して居ると想像する。そして若しエー・イーに就て皆のいふ事がほんたうならば、彼が此の偉大な愛蘭の詩人に似て居るといふ事以上に、何人に就てもより見事な事が云へようとは、思ひ附き得ない。

いろいろな人達との此等の爽快な談話こそ、此等の會堂のある町々で自由に呼吸する事を寧ろ困難にさせた因襲と最惡の意味での勿體振りとの空氣の猛烈さを緩和するために效能のあるものだつた。誰も新調の服を着て居た。男はキッドの手袋の中で汗

ばんで居たし、娘達は「イライジャー」の譜と祈禱書とを携へて居、また副監督達は瀟洒たる姿を示し、馬丁連はさつぱりとして非常に丁寧だつた。そしてどこへ行つてもロード・バーティーとレディー・ジェーンを見たなどといふ噂や、また昨日の晩有難い僧正様のすこしお疲れの様子だつたのに氣が注いたかなどと話すのが聞かれた。此等の音樂祭には、また、社交機關のやうな氣分があつた。慈善の不本意な侍女、音樂は、手前勝手に取扱はれた。それは餘りに無駄な事だと思はれたために、人々は音樂を毎日は持たなかつたが其の代りに十二ヶ月毎に大きな塊として持つた。それは藝術なしに人々が充分にまた生き生きと生活する事が出來ないからではなくて、それが社交上の機會に對する好箇の辯解と成つたせいなのだ。音樂それ自身も慈善のために此の音樂祭が成り立つて居るのだといふ點から、あんなに多くの罪を作り出す惡德を辯解された。それは此等の人々の心では辯解を要したからだ。

僕自身は、藝術上の道德問題に就てノーフォーク及びノリッヂ音樂祭の委員團と可成り激烈な喧嘩をした事があつた。十年か十一年前に、彼等は詩に對して二十五ギニーを、また其の詩に節附けた音樂の最上のものに對して五十ギニーの賞を懸けて募集した。僕は其の前者の懸賞に應じて、賞を獲た。僕の其の詩はブランク・ヴァースと抒情詩とで書かれ、其の題材はクレオパトラで、次ぎのやうな部分を含んで居た。

Iris

And when with regal, arrogant step she passed
Across the portico, her white breasts gleamed;
Her neck seemed conscious of its loveliness;
Her lips, tired of tame kisses, parted with
The expectancy of proud assault; she was
As one who lives for a last carnival
Of love, in which she may be stabbed and torn

By large excess of passions.

同じやうな感じの幾行かが此の外にもう少しあつた。そして僕は此れを書いた時立派だと思つた。尤も今でも可成りきれいだと思ふ。然し音樂新聞の一部はそれを猛烈に攻擊した。そして二ヶ月程の間僕は隨分評判の男だつた。紙上にあらはれた記事だの手紙だのから歸納すると、僕の劇詩はメンデルスゾーンの「イライジャー」の傳統を保つべき音樂を產みさうもないと云ふのだつた。それは僕の此れを書いた目的だつたのだ。僕はあの傳統に堪えられなかつた。僕はそれを破る事を手傳はふと望んだのだ。

低氣壓のまだ全く去らないうちの或る日、僕は、僕の作が演奏される筈に成つて居たノリッヂの音樂祭で指揮すべきサー・ヘンリイ・ジェー・ウッドから一通の手紙を受取つた。(それ以後サー・トーマス・ビイチャムの補助指揮者の一人として有名に成つたジュリアス・ハリスン氏が僕の詩の作曲に當選して居たのだ。)其の手紙の中にサー・ヘンリイはかう書いた。

『これは誠に小生の本意に反するものに候へども、ノーフォーク及びノリッヂ音樂祭委員團のために、貴下の「クレオパトラ」中不都合と認めらるる二行御變更被下候事若し可能ならば御願申上度此の狀認め候次第に御座候。(小生自身にてはどの行が不都合なるや發見致し兼ね候)…小生の見るところを以てすれば、此の申出はすべて不合理にて馬鹿らしく存ぜられ候』

僕は不都合な行を見つけ出す事が出來なかつた。僕は此の詩を一番初心な叔母に見せて、それを彼女が讀みながら惡い箇所に其の眼が達した時、急に顏を赤らめる事からそれが知れるだらうと望んで、彼女を注視した。彼女は顏を赤くしなかつた。彼女はただそれを讀み終つて云つた。

『まあ、ジェラルド、きれいねえ。あなたはこんなきれいな考へを持つて居るのねえ』

まさに其の通りだつた。

數日後、ジュリアス・ハリスン氏が加勢に來た。委員團は "her white breasts gleam-

ed" といふ句、並びに次ぎの二行を不都合と認めたらしく思はれた。

Her lips, tired of tame kisses, parted with
The expectancy of proud assault.....

僕は此等の行を變更した。そして其の作品は豫定通り、ノリッヂで演奏され、また倫敦のクインス・ホールで演奏された。其の後、僕の此の小さな詩がハヴァーガル・ブライアン氏の音樂で（彼も亦僕の詩に節附けて呉れたので）ランドン・ローナルド氏の指揮のもとに、サウスポートで歌はれた時、聽衆は其の不都合な行の出た時、席を立たうとしなかつた。いや寧ろ彼等は稍膝をのり出して一層よく聽かうとした。

僕は此の出來事を、それ自身が重要だからといふのでここに述べたのではない。それは此れが實に見事に我が會堂音樂祭の見解を説明するからなのだ。彼等の非宗教的の演奏會は會堂内で行はれる演奏會の反響だ。彼等は神が我々の靈魂を作り、惡魔が我々の肉體を作つたのだと思つて居る。彼等は間違つて居ないかも知れない。さうとすれば、惡魔が考察のうちに缺けて居ないのは明瞭だ。

* * * * * *

會堂音樂祭での我々の最も我れを忘れた幾瞬間かは、ジェー・エフ・ランシマン氏が此の作曲家に關する小著の中に「此の不祥な邪惡な歌劇」と形容して居るワーグナーの「パーシファル」に依つて與へられたのに疑ひもない。勿論、其の拔萃だけが演奏された。すべての不都合な部分は切り取られた。若し「パーシファル」が演奏臺の上で演奏されるのならば――そして舞臺で滅多に演じられない事から考へて、差支へはないではないか？――廣い美しい會堂の中に築かれた演奏臺の上で演奏さるべきだ。僕は窓壁の遙か上、屋根に近い見えないところから流れ下つたあの白い聲を憶えて居る。僕はいつでも仲間達の寧ろ迷はされたやうな乃至承知で恍惚として居るやうな顏つきを見ないで濟むやうに暗く彩られた窓の近くの席を占めるのを例とした。それは、僕が高遠な音樂を聽く際、他人の居る事に依つて感銘を減じまた妙に苛立たしい氣がす

るからだつた。

そして午に會堂から出て、此の三年近く見ないあの柔かな九月の英國の日光の中に歩み入り、川のほとりを散歩し……一哩程も散歩した上ホテルに歸つて冷たい肉と冷たいサラダを喰べ、冷たい酒を飲むのはうれしかつたものだ。僕がバイロイトに憧れて、あの小さなバヴァリアの町のヴィラ・ワーンフリートの庭園にあるワーグナーの墓をいつか見る事が出來るかどうかと思つたのもかういふ此等の時だつたのだ。

或る年、僕が或る作曲家に附け廻されたのはグロウスターだつたと思ふ。其れは勞作家であるものの才能に豐かではない人だつたが、其の作品に依つて隨分博く通俗的には持て囃されたので今度は一段と敎養ある人々の間に贊成を得たがつて居たのだ。僕に取つて最も不仕合はせな事に、此の人は僕の音樂批評が北の方では何等かの影響を持つて居るものと考へて居た。そして彼は此の推定に於てまるきり間違つて居たのだが、僕は其の間違ひを彼に納得させる事がどうしても出來なかつた。どこへ行かう

と、どうだ！彼は僕と一しょに成つた。そして其の小脇にはいつも其の作に掛る樂譜を抱へ込んで居た。何等か新しい、何等か實際まつたく近代的なものだと彼は僕に保證した。そして見て呉れないかと云つた。僕は見た。それは力弱く、下らないもので、誇大だつた。けれど僕は彼にさう云ふ事を好まなかつた。然し、彼が意見を無理にたづねた時、僕は充分ほんたうに近い事、卽ちそれが彼の以前の作よりずつと進歩して居るといふ事を云つた。此れは彼を喜ばせたらしかつた。そして彼は僕を晝飯に誘ひ出した。靜かに煙草を吸はうと思つてホテルの喫煙室へ入らうものなら、僕はいつでも戸口に空漠たる而かも勿體振つた其の姿を見、やがて、栓の拔かれた時三鞭酒の瓶のあわも氣持よく作り出す相變らずのポンといふ音を耳にするのだつた。そして泡立つた杯が僕の傍に置かれたものだ。

『そこで、「英雄の生涯」でリヒアルト・シュトラウスは……』と彼の聲は始めるのだつた。そして彼は「英雄の生涯」と其の美しさに就て總べてを語らうとし始めたものだ。

僕は彼を面喰はせるために、「カルメン」がシュトラウスの「エレクトラ」より、もつと見事な作品のやうに自分には思はれると主張するのを常とした。そして彼はシュトラウスに就てまるで何も知らず、また何の評價をも持つて居なかつたために、僕の方を寧ろ憐れむやうに眺めながら、彼も亦シュトラウスよりもビゼーの方を好んで居る事をつまり白狀したものだつた。そして實際彼にはアーサー・サリヴァンが……

一日、我々二人ぎりの時、彼は其の作品に就て、續き物の記事を書いて呉れまいかと云つた。面喰はされるのは僕の番だつた。

『續き物？』とすつかり膽を潰して僕は訊いた。

『さうです。續き物です。最初にはバート・ソングがあります。それから器樂の曲があります。最後にカンタタです。極く短いんでいいんですがなあ、皆で三つだけです』

彼はカンタタのCを花文字のCで發音した。

僕は躊躇した。けれど彼は非常に懇願するやうに僕を眺めて居た。僕は一寸諷刺を試みたが、それは彼を却つて餘計に頑固にさせた。そこで僕は明らかに斷はつた。そして斷はりを續け、また斷はりを止めなかつた。

『それなら、ぢやあ私の新作に就て先達あなたの仰有つた事を書いて、署名して下さいませんでせうか？あなたはそれが私の今迄中での一番の傑作で、獨創的で、力に富んで居て、驚くべく清新で、和聲が玄妙だと仰有つたのを御記憶でせう』と彼は暫らく經つてから云つた。

『え、まつたくそんな事を云ひましたか？』と僕は抗辯した。

『ええ、まつたく仰有いました』

そこで僕は大いに大いに節制を失つた。そして、それ以後、二人が出逢つた時にはいつでも非常に鄭重にお辭儀をして、一言をも發しないのを例とした。

斯の種の人――そして此んな人はよくある――は、より重要な音樂祭に附き纏つて居る。けれどさういふ人が其の望みをかなへる事は殆んど無いに相違ない。

＊　＊　＊　＊

諸君は諸君の今迄目擊した中の最も奇妙なまた最もあり得べからざるやうな光景を頭に浮べる事がお出來に成るか？我々の多くは、極く尋常な生活の幾日かの間にさへ奇體なものを目擊する。けれど今迄僕がぶつかつたすべての奇體なものの中で、ウスターで見た一部屋の中に座つて居る四十人の風琴家程氣まぐれな、法外な、また根本的に馬鹿氣たものはない。二人乃至三人ぐらゐの風琴家が一しよに話して居るといふのなら想像も出來るが、四十人――而かも四十人中の十五人は會堂の風琴家――といふのは事實とは信じ兼ねる。

さて、諸君が近代音樂を愛するからには、風琴家であつて、ただそれだけだといふ人間は共に語るに足りないといふ事を本能的に感じなくてはならない。十中の九迄、さういふ人間は物を退化させようと努めて居る。彼は音樂の爲しつつある急速な進歩を嫌ふ。そして風琴の vox humana ストップと同程度の想像力しか持つて居ない。

そこでだ、四十人の風琴家が座つて話したり、煙草を吸つたりして居た。そして僕が彼等と、彼等の穩やかな然し面倒臭さうな顏とを眺めた時、僕及び僕の友達には、藝術、道德、並びに通常の作法の爲めに、何等かの抗議が行はるべきだと思はれた。そして我々は我々がそれを行ふべき適任者だと決めた。若し彼等が何か職業上の問題例へば、如何にして俸給の增加を得ようかとか、如何にして夫々の牧師よりも優らうかとか、如何したらデビュッシイ乃至ラヴェル、でなければマクス・レーガーにしろ、理解し得るやうに其の心を廣くする事が出來るかといふやうな問題を論じ合ふために集まつて居たのだつたら、我々も許す事が出來たらう。けれども、彼等は單にお互ひの懇親をたのしむために集まりたいから集まつたのだ。途方もない馬鹿な事だ！彼奴等にはその如何に馬鹿氣て居るかがわからなかつたのか？一部屋に風琴家四十人！冗談ぢやない。全世界にでも四十人の風琴家は多過ぎる。

幸にも、其の部屋は一階にあり、夜は更けて居た。友達と僕とはホテルの外へ出て

人通りの無くなるのを待つた。そして、内側を靜かにさせるため、窓硝子を三度宛トン、トン、トンと繰り返して叩いた。それから二人は二部で、僕は高い裏聲で友達は沈んだ低音で「イライジャー」の中の「バアル・コーラス」を歌つた。"Baal, we cry to thee! O thee! Baal, we cry to thee!" と。

我々が此の美しい音樂——あの可愛いいい、優しいメンデルスゾーンに依つて、野蠻人の叫びのつもりで作られたものの、其の實はまつたくきれいな子守唄である——を始めると、間もなく、内側の部屋から愉快らしい哄笑の叫びが聞えて來た。そして帽子も被らず、眞劍な樣子で二三人の風琴家が通りへ飛び出した。

『中へ入りたまへ。入つて仲間に成りたまへ。君達は我々の仲間だ』と彼等は云つた。

此の案内に返事も出來ないくらゐひどく仰天させられて、我々は後向きに成つて逃げ出し、我々のホテルへ飛んで歸つた上、ウイスキイ・ソーダを云ひつけた。

我々が次ぎの日此の話を聞かせた大音樂家は云つた。

『成程、そりやあ「人を呪はば穴二つ」つてやつだね』

けれども、友達も僕もさうは思はなかつた。

伯林と其の或る人々

十年程前の或る冬、僕はそこで二度演奏會を催さうと計畫して居た有名な英國の洋琴家フレデリック・ドウスン氏と同伴して伯林に行つた。我々は贅澤な而かも振はないホテルのフュルステンホーフに泊つて、表に面した一揃ひの室を占めた。カール・クリントウォルトがドウスンのために約束して置いた其の大きなドロウイング・ルームには、良い洋琴があつた。

さて、伯林では、音樂はまるで取引だ。誰も彈くか歌ひかし、また誰も誰かに彈きまたは歌ふ事を敎授する。

君が頗る非常な聲價を持つた藝術家でない限り、(時としてはさうであつても)批評家を買收しなければ、誰にも自分の演奏を彈く事を肯ぜしめる事が實際上不可能なの

を發見するだらう。シイズンには、二十、三十、四十の演奏會が毎晩開かれる。そして其等の殆んど大部分はまるで聽き手が無いのだ。が、そんな事は關はない。歐羅巴の經驗を持つた演奏家は誰しも唯一つの事しか豫期しないのだ。音樂家は金を儲けるために伯林に行きはしない。彼は名を獲に行くのだ。伯林の證明は、不變の、また一般的の名譽を得ようと望む洋琴家、ヴァイオリニスト並びに歌手に取つて絶對的に缺くべからざるものだ。(乃至最もきつぱりと、「だつた」と云はう。)戰爭以前には、スヌック氏は若しさうしたいのならどんなに骨を折つて、どんなに猛烈に、またどんなに長い間でも彈く事が出來た。然し、彼が伯林で知られて居たといふ事が知られて居なかつた限り、また彼が伯林で知られて居なかつた限り、彼はどこででも二流の男、ただ腕前のある素人と思はれた。それ故に、殆んど誰も、新聞の評言、色よい言葉で書かれた新聞の評言、賞讃にかがやき裏面の影響の臭氣を放つ新聞の評言を獲得するため以外には伯林で歌ひ若しくは彈かなかつたと云つても、それはまつたくほんたうの事だ。

例へば亞米利加、佛蘭西、乃至丁抹の演奏家は數年間の貯蓄を携へて伯林に出掛け、一寸ばかり演奏會を開き、新聞から其の評言を切り取つて、故國に歸るだらう。それから勝手に、云ふ迄もなく伯林の評言の分別ある拔萃（それは常に非常に字義通りには飜譯されない）から成る廣告をする。此の伯林訪問は演奏會場を借りたりなどするために千や二千の金は掛るだらうが、それはうまく使はれた、うまく投ぜられた金として見做される。

フレデリック・ドウスンは伯林と維納を既に數回訪問して居た。そして其の出演が多數の熱心な聽衆をいつも集めた程、兩方の都會で知られて居た。けれどもドウスン其の人とダルベア、ラモンドの二人を除いては、どんな英國乃至半英國の洋琴家も、さうする力を持つて居なかつたと僕は想像する。

僕は多數の批評家や演奏家に紹介された。批評家は殆んどきまつて博士で、其の博士はまた殆んどきまつて教授だつた。彼等は皆學歴を持つて居た。そして皆教授した。

彼等は一晩に五つ、六つの演奏會を驅け廻つて、——而かも極く僅かな報酬を受けて——働き過ぎて居た。彼等は一つのホールから他のホールへとタキシで飛ばして一寸した心おぼえを書きとめて、そして下目をつかふのだつた。また特別のホールを去らうと欲した時には、こつそりとうしろを向いて、燕尾服の尻尾をちやんと揃へた上、細そりとしてすうつと、若しくは肥つてよたよたとドアの方に行くのだつた。

此等の先生方の或る者が若い乃至經驗のない演奏家に對して非常に怪しからぬ事をするといふ事を僕は聞いた。彼等は上品な強請業に精を出した。勿論それはキッドの手袋に包まれた上品なものだが、そのキッドの手袋は、餓えた鷲の恐ろしい爪を包んで居るのだつた。次ぎに記す處は、彼等の此の良い小さい習慣の一つを描き出すのだ。

近く三回の演奏會を開くであらうといふ事を其の代理業者の廣告して居た歌手なり洋琴家なりの伯林到着を耳にして、批評家は此れを訪問し、其の計畫に興味を感じて居る事を述べた上、其の演奏家に歌ふなり、彈くなりするのを聽かせてもらひたいと

頼むだらう。此のお世辭に演奏家は尠くとも良い評言の一つだけはたしかに占めたと思つて直ちに承知する。そして其の最上乃至最惡を盡した後、次ぎの會話に似たやうなものが交換されるだらう。――

批評家『誠に結構です。が、ショパンのあのイ短調のエチュードは、勿論、可成り俗に成つてますからな、あれはあなたのプログラムの中にはお入れに成るんでは無いでせうなあ？』

演奏家（可成りたじろいて）『實は入れる積りだつたんですが……然し、若しあなたがさうお考へ……』

批評家『ええ考へます。斷然考へます。伯林にはあれを彈く者が尠くとも一萬人はある。それにあなたが何も一萬一人目に成る事はないぢやありませんか？ デビュッシイぢやどうです。ねえ、デビュッシイぢや？ でなければブゾーニでもいい。ブゾーニは書きますからなあ』

演奏家（熱心に）『ええ、ええ、私は何かデビュッシイを彈きます。「金魚」か「月光」か』

批評家『「月光」は少し時代遲れぢやあないですかなあ？ まあ然し彈いて御覽なさい。今彈いて御覽なさいと云ふんです』

演奏家は半ば腹を立てながらも、批評家を喜ばさうと非常に心配しながら云はれた通りに彈く。

批評家『あゝ、さうだ、あなたは中々の腕前だ。私は、さうですなあ、ええ私は新聞にあなたの事を讃めていいとまあ思ふんですがね。それに就てですな。或る物が、或るちよつとしたものが、あなたの彈き方には缺けて居るんです。あなたのリズムは流動が足りない。まあ、さう申してよければ、もう少し動きが多くなくてはいけないんですがな。それからあなたのテムポ・ルバートの使ひ方が……うむ、さうだ、私はお教へが出來る。私はデビュッシイが自分で此れを彈くのを聽いたんですからなあ。さうして私はそれがどう彈かるべきだといふ事をちやあんと知つてるんです』

演奏家（絶對的に二の足を踏んで）『あゝ……成程』

批評家（彼の言葉の消え去るのを待って）『そこで、私があなたに稽古をまゝ假りに二度しようと云ひ出したとしたらあなたは何と仰有るだらう。一度が一ギニー半です。半時間の稽古ですがな』

演奏家（粗々しく向き直りながら）『そんな事をお云ひ出しなら――勿論、まだなさらないですが――けれど若しそんな事をお云ひ出しだつたら……』

批評家（最も非獨逸的の懇懃さで）『勿論、私が稽古と申上げた時には、まつたくよくない言葉を使つたのでした。私のつもりは暗示とか諷示とか云ふのだつたのです。一寸お示しするだけの事でさゝ。傳統の移動ですかな、つまりデビュッシイからあなたへ其れを移すんです。申す迄もない事ですが、皆が皆デビュッシイの彈くのを聽いて居やゝしません。で、私のから其の曲は彈かるべきだと知つて居るやうにデビュッシイを彈きでしたら、あなたは伯林でさうした最初の方に成るわけです。さうして私は新聞

に其の事實を報道しませう』

演奏家『わかりました。ええ、わかりましたとも。あなたの仰有る通りなんでせう。あなたは私が――何と云ふ言葉を使つていいかわかりませんが――二度ぐらゐの稽古で其の傳統を飲み込む――と云ひませうかな――事が出來ると信じておいでに成るんですか』

批評家『飲み込めないわけはないと思ひますなゝ。但、尤も三度目の稽古が必要だと決めるかも――いやお互ひに同意するといふ意味なんですよ――知れないんですが。最初の稽古を今やりませうか？』

演奏家（今はすつかり平氣に成つて嫌味をいふやうに）『稽古？ 私の最初の暗示や諷示ですね。よし來た……やりませう。』

彼等は友達に成る。彼等はお互ひに理解し合ふ。二十四時間のうちに、演奏家のポケットから批評家のポケットへ三ギニーが轉がり込む。そして時が來ると、其の批評

家の新聞へ六行程の讃辭、黄金のギニーの讃辭が現はれる。結局、何て單純で何て都合がよくて、何てすべてが正當で快活なんだ！

君はそれつぱかりの事にそんな澤山の金を拂ふ演奏家を馬鹿だと思ふかも知れないが、それは全然間違ひだ。それは、「それつぱかり」の事ではない。昔の、戰爭以前の時代には、此等の六行程の讃辭が、紐育、ボストン、フィラデルフィア、市俄古竝びに其等の間の大きな町々で價値のある約定を結ぶ事を助けたのみならず、また倫敦、マンチェスター、ブラッドフォード、リーズなどや、巴里、リオン、ルーアン、マルセーユ、ボルドー、ブリュッセル、ゲント、アントワープ等でもさうだつた。けれど、獨逸では駄目だ。獨逸はよりよく知つて居る。マンハイム、コローン、ハノヴァー、ドレスデンなどでは駄目だ。伯林の秘密は戰爭の何年か前に獨逸のすべての都市に知られた。そしてあの最も素敵な都會の批評家の面白い子供らしい習慣は横目で眺められ……横目で眺められ……横目で眺められた揚句模倣された。そして模倣者達は其秘

密の箴言として"Honi Soit"（惡しく思ふものには禍あれ）を持つて居た。

* * *

實に下等な都會は伯林だつた。が、何も伯林の全體がすべて下等だつたのではない。けれど、藝術的、音樂的の部分が、シエラ・レオネの貧民窟に就いて歴史的の場合にチョーンレイ・モンタグの云つたやうに『實に實にひどい』のだつた。

とは云へ、カール・クリントウォルトは下等なところを微塵も持つて居なかつた。クリントウォルトに就いて書くと、何だか自分が年寄のやうな氣がされる。そして諸君も亦それを讀みながら何だか年を取つたやうに感じはしまいかと氣づかはれる。クリントウォルトが如何にも非常に、過去に屬して居るのを諸君は御承知だ。けれど彼は其の時代の大した人物だつた。そして今日愚劣な人々がリヒアルト・シュトラウスに就いて考へる事を愚劣な人々（そして彼等は殘忍に愚劣だつた）が、ワーグナーに就いて考へたあの馬鹿な、野蠻な時代に彼を知つて居た多くの人達が、現に倫敦に居る

に相違ない。

クリントウォルトはワーグナーの弟子だつたのみならず、ワーグナーの豫言者の一人でもあり、先驅者でもあつた。そしてまた彼は大洋琴家、大指揮者、大人物だつた。

人間中の最も宏量な人の一人であるフレデリック・ドウスンは僕をクリントウォルトのところへ伴れて行つた。そして僕に就いて愉快な、世辭めいた事を此の大音樂家に云つた。クリントウォルトは大變年寄りで、八十ぐらゐだつた。そして彼の物を云ふ時には恰かも墓の向ふへちやうど行つて居て、而かも其處で不幸でない人の聲を聞くやうな氣がした。

僕は彼がワーグナーに就て話すやうに仕向けた。『何が儂に云へるだらう？何にもない。ワーグナーは神の生れがはりだつた』と彼は默想に耽つた。

彼の大きな眼、白と云ふより象牙色をした顏の中の色のある二つの大きな池は、煙ぶつてやがて急にパッと燃え立つた。常に少しく顫へて居る彼の手は、其の時可成り

烈しく顫へた。僕は此の老人を眺めた時、ワーグナーが「名歌手」や「トリスタンとイゾルデ」の偉大な譜面の中に生きて居ると同樣な强さで、彼の中に生きて居る事を感じないでは居られなかつた。

我々は默つて座つて居た。外國のアクセントで最も氣持よく英語を話した英國の婦人であるクリントウォルト夫人は手を拱いて微かに嘆息した。ドウスンは『默つて居ろ。でないと、彼は話し出すだらう』といふ意味を目顏で知らせた。

そして暫らくの間、彼は話した。身振りもせず、身動きもせず、どこを見るともなく空間を眺めながら、クリントウォルトは話し始めた。(彼は僕が殆んど獨逸語を知らない事を知つて居たので英語で話した。)

『紳士である以上誰も、つまり武士的の普通の感情を持つたものならば誰も、我々の世界の玉の一人の面前にあるといふ事を感じずに、ワーグナーに會ふ事は出來ませなんだ。英國でも獨逸でも、或る人達はワーグナーに就て、愚な事を書いた。此等の人達

は彼の缺點を指さし、また彼の罪を頻りと鳴らしたのでした。儂はかういふ奴等が嫌ひだ。缺點に罪？どこに缺點のないものがあるだらう？どこに罪を犯さないものがあるだらう？あなた方英蘭人は「アンキャンニイ」(奇しい)といふ言葉をお持ちですなあ？でなければ蘇格蘭の方か？ワーグナーはアンキャンニイでした。あの人は物の中に潛り込んだ。うむ、さうだ、潛り込んだのでした。さうしてな、青い海の中に身體をかくしてしまふ度毎に、眞珠を持つて歸つて來たのでしたよ。眞珠かな？いや、眞珠には不思議がない。あの人は其の度毎に、今迄見つけ出された事のない寶石(ジェム)を持つて歸つて來たのだつた。……「寶石(ジェム)！」何て英語には妙な音があるのだらうな……Jem… Djem! などと』

彼の年取つた使ひ古され、疲れ果てた心は其の作用を中止するやうに思はれた。彼は毫も生色を示さずに座つて居た。それは時計が止まつてしまつて居たやうであり、灯が消えてしまつて居たやうだつた。やがて、格別何の原因もなしに、彼はまた生き返つた。

彼は立ち上りながら『洋琴のところへ行かう』と云つた。

そこで我々は今迄座つて居た小さな部屋を出て、其の遙かの端にグランド・ピアノのあつた大きな音樂室に移つた。クリントウォルト夫人、ドウスン及び僕はドアに近い半ば暗いところに座つた。クリントウォルトの高い可成り縮まつた姿は鍵盤の上に低徊する光のところまで室の中を動いて行つた。彼はリストのいくつかの殆んど知られて居ない曲を高貴であると同時に半分破滅したスタイルで表出しながら彈いた。彈奏の興奮は彼の肉體的の衰弱に力を與へるといふよりも唯增加するだけのやうだつた。そして澤山の間違つた音が叩かれた。

此の老人が其の內部に再び火を燃え立たせやうと試みては失敗して居るのを見るのは非常に悲愴だつた。そして若し何等かの奇蹟的の努力で、彼が成功したなら、若しとうに燃え盡した灰がまた實際に熱い焰と燃え立つたなら、彼の脆弱な肉體は消耗さ

れてしまふだらうと僕は感じた。

彼は僕に其の寫眞を呉れた。そして其の裏に文句を書いた。かうして僕は彼のところを辭した時、二度と彼を見る事はあるまいと思つた。ところが、數日後、僕はフレデリック・ドウスンの演奏會の一番前の側に彼を見た。そして僕はドウスンが其の言語に絶した演奏に依つて我々を愕かした時、時々深い聲で彼の『ブラヴォー』と云ふのを聞いた。

クリントウォルトはそれから幾年か後まで餘命を保つて居た。そして昨年マセドニアに居た時、僕は或る新聞に彼の長逝を報じて居る數行を見た。千八百七十年代には彼は倫敦での大立物だつた。そして當時のワーグナー崇拜家等は其の天才に對するばかりでなく、其の至誠、其の高潔な心事、其の藝術に對する獻身に對してクリントウォルトをも亦崇拜した。

* * *

* * *

伯林滯在の最後の日に、僕は好奇心から、うはべは職業上の事をたづねるやうに見せて、實は藝術の下界を眺めるために或る有名な演奏會代理業者の事務所に行つた。それは、すべての藝術の實務的側面が、殆んど常に多くの皮肉と、奇妙に冷笑的の氣分とを藏して居る其れ自身の下界を持つて居るからなのだ。

事務所は演奏家で一ぱいだつた。そして此等の演奏家の大部分は日の出の勢ある人達で、また其の全部は皆人に知られた地位にある人達だつた。彼等は代理業者の依頼人——卽ち其の演奏の約束をする事が出來、またそれに熱心で、而かも其れに對して可成りの金を拂はうとする人達——だつたけれども、まるで願ひの筋があつて來てでも居たやうに、法外の長い時間を待たされて居た。尤も實際彼等は願ひに來て居たのだ。何故なら、オット・ツグシュタイン氏は常に其の態度に依つて、恩顧を與へるのは自分で、名譽を受けるのは君だといふ事を完全に明らかにしたのだから。彼は熱情的な鋭い頭腦と、猾い小手先きの利く腕前とを持つて居た。

そして彼の仕事と人生の目的とは何だと云へば、彼はちやうど出版業者が作家と讀者との聯鎖を成して居るやうに、演奏家と世間との聯鎖だつた。オット・ツグシュタインは洋琴家、歌手、ヴァイオリニストなどを「出版」したのだ。彼は其等の人々のために演奏會場を借り、切符を賣り、其の金を集めた。卽ちプログラムを刷つたり新聞に切符を配つたり廣告をしたり、其の他の事をするのだ。勿論、歐羅巴のすべての大都會には名譽ある職業に名譽を以て携はつて居るといふやうな人が澤山居る。けれどツグシュタインは不名譽の中に沒頭して居た。彼が伯林中のすべての有力な音樂批評家を其掌中に操つて居るといふ事は公然と云はれて居た。彼等は夫々の主筆の爲に働く代りに、事實、彼のために働いた。彼は殆んど、どんな新聞に、どんな演奏會に就ても、長い熱心な評言を自由にする事が出來た。彼はまた甚しい罵倒の批評の掲載をもさせる事が出來た。若し君が伯林で成功しようと欲して居る實際偉大な藝術家だとして、彼若しくは彼の友人が、君の成功するのを不利だと思つたなら、彼は君の成功するのを妨害する事が出來たし、またさうした事だらう。

彼は、時々、其の座つて居た內側の私室から現はれて、一二分間我々の間を動き廻り、握手を交換したり、微笑したり、其の他のうはべの愛嬌を振り蒔いた上、彼に特別の用件のある男なり女なりを選み出して、一しよに其の自分だけの事務室に戻つた。彼が姿を隱すと、待つて居た連中の或る者は意味ありげに微笑を交はした。

ツグシュタインは、人が三四年前さう書くのを慣ひとしたやうに僕を「抱き込まう」とした。彼はそれ程の腕前ある惡漢だつた。見掛けは至極腹藏なく、至極大つぴらに働いて居るやうで、其の實準備された瞞著の多量を以て働いて居る惡漢だつた。

僕は最も辛棒强く待つて居た。そして時經つて彼が再び其の內密の部屋から出て來た時、彼は其の右の眉毛を以て、僕にたづねた。そして左の眉毛で、殆んどわからないくらゐに僕を招き、先きに立つて、其の部屋へ案內した。僕は其の時、稍冒險をして居ると云ふやうな樣子である事を認めながら彼に附いて行つた。そして憐れなピール

ズバッブ其の者のやうに虚言をつく事に決心した。

二人のうしろにドアの閉められた時、彼は英語で云つた。

『今日(こんにち)は、お掛けに成つてそれから葉巻をお取り下さいませんか？』

彼は神秘的に其の膝のあたりから箱を取り出して、凝つと僕を見つめた。

『それからウイスキイは？』と彼は微笑しながら、附け加へた。

『私は自分では決していただきませんが、御國の方は』と辯解した。

僕は此等の三つのすすめをすべて受容れた。

『私は、私の友達の那威人が來年の正月にこちらで開かうと希望して居る六回の演奏會——洋琴の演奏會ですがね——の事でお目に懸りに來たんです』と、葉巻へ火をつけて、それを味はつた後に僕は云つた。

『失禮ですが』と彼はたづねた。そして『失禮ですがあなたのお名前は何と仰有るので御座いませうか？』と其の質問した時、彼は稍つんとした。

僕は詫びるやうに微笑んで、ジェ・ラルド・カムバーランドといふ名前の刷つてある名刺を名刺入から取り出した。

『フュルステンホーフに泊つて居るんです。四千一號室』

心を許して、而かも猶注意深く、彼は名刺の上に僕の部屋の番號を書いた。

『おわかりだらうと思ひますが、私は英國から來たのです。御當地へ參つたのは此れが始めてです。私は藝術に——音樂に趣味を持つて居ます』と僕は氣輕な御し易いやうな身振りを用ゐた。『さうして、私の那威の友達のジグールド・ファルク君が私の伯林に立つ事を聞いて、あなたに或る事柄を相談して呉れまいかと頼んで來たのです。ファルク君はあなたのお名前を、友達から聞いて知つたのでした』

此の時分に彼はウイスキイを注いで、其の大部分は僕が飲んで居た。ところで奇體な事が起つた。それはウイスキイを飲んだのは僕だのに、機嫌がよく成つたのが彼だつた事だ。彼は機嫌が良いのを通り越して、殆んど好意的に成つてしまつた。

『何を御友人は伯林でなさるお望みなんでせうか？』と彼はたづねた。
『洋琴を彈いて、すこし金を儲けるんです』
彼は、若し同情するやうに不同意を表すると云ふ事が云へるとしたなら、同情するやうに不同意を表した。
『金を儲ける事は伯林ではむづかしいですよ。が、まあ出來るだけの事を致しませう。六回でしたな？』と僕を見詰めながら彼は云つた。
『六回です。そして此の最初の御面會で、私は此の六回の演奏にどのくらゐ掛るかざつとした豫算を伺ひたいと思つたのです』
『なあに、それは總べて　もう一杯ウイスキイを如何です？　……おいや？……それは總べて何に依るのです。といふのはすべての事柄に依るのです。どのホールがお望みでせうか？いや、それより先づどのホールをお使ひに成れるかお話しする必要がありませう。あなたは寧ろ、いや大分遲くいらつしやり過ぎましたからな。今は十一月

です。さうして御友人は正月に彈き度いとお云ひなのですから。どんなホールも皆何ヶ月も前から大抵約束されるのです』
我々はホールや、日時其の他の委しい事を相談した。それから彼は紙の上に數字を書き散らし始めた。
『新聞の方は？』
『は？』
『あなたは、いやあなたの御友人は色よい批評をお望みで御座いませうなあ？』
『なぜ？勿論です』
『聽衆は？』
『聽衆の種類の意味ですか？』
『私は勿論男の學生も幾らか集める事は出來ますが、まあ聽衆の大部分は女だらうと氣づかふのです。其の代り、聽衆の熱心な事は保證してもよう御座んす。尠くも三度

や四度のアンコールはね』

『それなら、新聞も聽衆もです』

彼はもう少し書き散らした。

『總體の豫算ですか』と彼は訊いた。

『どうぞ、で、總體と云ひますと……？』

『何もかもです。ホールも、印刷も、廣告も、それから一寸した案内も、前評判も、聽衆も、批評家の記事もすつかりです。それから批評家の評言ばかりではなく、實際聽きに來る事もです』と彼は附け加へた。

彼は五分程頻りに計算して、本の中の日割を見た。そしてやがてテーブルの光つた表面を僕の方へと、僕の空想上の友人が催さうとした演奏會に對するチャンと書き出された豫算を非常に靜かに突き出した。其の總額は英國の金に換算すると三百二十五磅だつた。

『誠にありがたう御座いました。多分明日また伺ひます。但、先づ第一にドルンさんから豫算を取つて見なくては成らないのです』

『ドルンさんといふのはどなたです？』と彼は驚いてたづねた。

僕は知らなかつた。彼の名前は其の瞬間に僕の頭にヒョイと浮んだものだつた。そして僕は世界中にそんな名前があるかどうだかよく知らなかつた。そこで、勇を鼓して、大いに虚言をついた。

『ジグールド・ファルクの從兄なんです』と僕は云つた。

僕が歸る時、彼は更に一本の葉巻を呉れて最も親しげに握手した。そして非常に鋭く僕の眼を見つめた。

* * * * *

毎晩、ドウスンと僕とは、歌劇か、でなければ何かの演奏會に出掛けた。そして音樂の終つた時——それは大概隨分夜更けてからだつた——我々はあれかこれかの會合に

行くのを恐らく例とした。僕は或る晩、胸の盛り上つた容貌の堂々たるワーグナーの女主人公型の婦人が幾皿も幾皿も牡蠣を平げるのを、到頭どうしてから一時に伯林にからも澤山の牡蠣が來たものかと訝り始める迄、感服し仰天して眺めて居た事を覺えて居る。

＊　＊　＊

此の時代に、エレナ・ゲルハルトは大柄で、色白く、且つ穩やかだつた。恐らく彼女は少し苦味があつた。そしてたしかに大いに失望された。僕は英國へ歸つてから間もなくマンチェスターで彼女に會つた。そして其の心が無趣味で、其の精神の生溫い事を感じた。

＊　＊　＊

エゴン・ペトリは殆んど英人のやうな鈍味を持つて居た。彼はほんたうの彈くだけの人で、最も靈感的でなかつた。そして何でもかでも覺えたくせに、何も判然と說明

しない頭の持主だつた。彼は實務上の能力を持つて居て、始終ぐんぐん進んで行つた。が、どこへも到着した試しがなかつた。其の立派な手袋を篏めた手に返事をする磨かれたノッカーのある彼の家の掃除の行屆いた戸口以外に、彼はどこと云つて特に行き着くところはないだらう。

＊　＊　＊

矢張りマンチェスターで、殆んど同じ時代に僕はリヒアルト・シュトラウスに會つた。僕は三つのうち尠くとも一つは顏に依つて人を判斷する事の賢くない事を持論として居た。

然し、僕は一寸の間、話を横道に外らせなくては成らない。此の顏の問題は至極興味がある。人は誰でも云ふ迄もなく自分獨特の顏を持つて居る。たとへ我々の中の最もみつともないものでも相當の己惚がある。なぜと云へば、我々がみつともないとして、また其のみつともないのを承知して居るとしても、我々は次ぎのやうな考へで、い

つも自分を慰める。

『さうさ、けれど此れは特別の種類のみつともなさだ。俺のみつともなさには力がある。品性がある。精神がある。俺のみつともなさは獨創的だ。俺のみつともなさのやうなみつともなさは外にはない』

それは、他人のと違ひさへすれば、それでいいのだからだ。さて、我々の顏の造作上――生れ落ちるから死ぬ迄ずつと續く過程――我々の或るものは、顏でなく、假面を造らうと非常に骨を折る。我々の顏は我々の精神を表現しない。其等は隱してしまふ。此の結果として、諸君はさう度々ではないものの時として、貧相な振はない顏つきで實際は一等級の頭腦の持主である人に出逢ふだらう。けれども、理智の人相上の暗示を抑壓する事は困難だ。どう、眉の形を變へたり、だらしのない愚かな眼つきをしたりしようとしても如何に殆んど出來ないかを試してみたまへ。

リヒアルト・シュトラウスは變相して居る。間近く寄つて見れば、彼の頭の格好のいいのと共によくつり合ひの取れて居る事が直ぐとわかる。そして珍らしい程高い額と堅く締つた圓味ある唇、またしつかりした頰が目に止まる。『財政家だな、兎に角財政家でなければ事務家だ。事務を取つて人を使ふのに慣れて居る人だ。どうしたつて夢想家ぢやあない。――詩人だの、音樂家だの、乃至どんな種類の藝術家でもない』と君は獨語する。

彼は情緒をあらはさない。自制して、彼は要點以外の事はしやべらない。大成功の際でさへ、彼は控へ目で實務的だ。決して油斷をしない。彼は精々警戒して居る。『智惠ばかりで情がない』と君は云ふ。尠くとも、若し不注意な觀察者だつたなら、君はさう云ふ。

彼の嗜好は至つて單純で、作曲家としては隨分多くの金を蓄めて居るが、馬鹿らしい程彼は儉約だ。彼は寧ろ惡口を好んで居る。そして批評家が彼を馬鹿にする時、彼は無暗に面白がる。人間の虛榮や人間の愚昧の光景は彼を興奮させる。彼の握手は堅

く其の眼差は眞直ぐだ。

彼の洋琴演奏はきれいにさつぱりとして居るし、また洗練されて居る。然し、彼は其の樂器の名手ではない。

二人の管絃樂指揮者

サー・トーマス・ビイチャム——ランドン・ローナルド

サー　トーマス　ビイチャム

サー・トーマス・ビイチャム（當時はただのミスターだつた）は、料理店へ煙草のブリキ罐を持つて來て、それを食卓の上に置き、そして其のパイプを詰めに掛つた。彼は話好きではなかつた。彼は靜かに煙草を吹かしながら、そしてまた實際は其の連中が四五人居たのだが、全然獨りで居たやうに振舞ひながら、其の椅子にただ凭れて居た。彼は羞かんでは居なかつた。彼は單に我々に無頓着だつたのだ。若し何とか話し掛けたら、彼はただ「ノー」とか「イエス」とか云つた。そしてうんざりして居るやうに見えた。彼はまさにうんざりして居たのだ。

そしてかうして彼は十分程座つて居た。それから輕い嘆息をついて立上り、物も云はず見向きもせずに我々の間から立ち去つた。彼はちやうど消え去つた。そしていつまでも歸らなかつた。

ランドン　ローナルド

恐らくランドン・ローナルド氏は、僕が彼を英國音樂家中の最も藝のある人だと呼んでも、腹を立てはしないだらう。若し僕が藝があつて其の外は何にもないと云つたのなら彼はいくらでも腹を立てる權利を持つて居るだらうが……「藝のある」といふ言葉は隨分昔に我々を連れて行くぢやあないか？　尠くも二十年。ところが僕の知るところでは反對に、それはバトネイで今も使はれるらしい。僕はチェムバースが「藝」を「飾りに成る技能」と定義して居るのを見る。そして僕の少年時代には、それはまつたく其の意味通りだつた。若い婦人達は洋琴を彈く技術、繪を描く技術、暗誦の技術などを習得した。此等の婦人達の如何なる技術上の熟達も既にそこに在つた才能を發達させた結果ではなくて、それは他のものに費さるべきだつた執拗の結果だつた。けれど今はその精確な意味で「藝のある」といふ言葉を用ひなく成つて居る。

ランドン・ローナルドは其の天性に天才の氣質以上のものを持つて居る。そして彼の頭の良さは、殆んど不合理なくらゐに超凡だ。彼の天才と彼の頭の良さとは數分間の會話にさへ明らかだ。彼は頭の良さを射出する。そして彼が部屋に入つて來るや否や、早い、電氣のやうな或るものが周圍に加へられたやうに感じられる。

僕が彼に始めて逢つた時――十年前だつたかしら――彼の一つの野心は大指揮者として歐羅巴中に認められる事だつた。彼は勿論英國でさう認められて居た。それから羅馬訪問は伊太利の公衆と批評家の兩者を熱心に燃えさせて居た。然し倫敦と羅馬は歐羅巴ではない。ところが當時伯林は最も判然とさうだつた。彼は自身に就て最も氣持よく淡白で、また熱心に溢れ、すべての人生の冒險に就て喜びに滿ちて居た。

『勿論、僕は僕の歌曲がほんたうの歌曲ぢやないのを知つてる。僕は調子の好い曲が書ける。さうして僕は音樂家だ。おまけに僕はそんな種類の作をする大概の連中よりもちやうどいいくらゐに頭が良いんだよ。けれど君は僕が自分の作曲を眞面目に取扱つてると思つてはいけないぜ。僕はそれが可成り「きれい」――「きれい」つて言葉が當つてるねえ？――だと思ふ。さうして僕は發明するのを面白がつてるんだ――「發明」つてのも矢張りうまい言葉だ――どうだね？　其の外、それは金に成る。それは僕がもつと眞面目な仕事――といふのは指揮だが――を續けて行く間に、僕の暮しを助けて呉れるんだ』

ハヴァーガル・ブライアンは其の部屋に居た――我々はあの下卑た下等な町、ブラックプールに居たのだ――そして彼は實に澤山の才能ある作曲家が時々氣の注いたやうに、自分が公衆のほんたうに好む曲を書く事の不可能な事に氣が注いた。

『僕の書くものは大抵どれもこれも管絃樂用の大規模なものなんだ。僕はいつでも何

か新しい事を、有りふれたやりかたを脱した何かをやらうとするんだ』

『あゝ、だけれどそれはね、君は作曲家で、僕はさうぢやないんだ』と至つて眞面目にローナルドは叫んだ。

ブライアンは得心させられた。そして僕は其の手際に感嘆しながらローナルドを眺めた。が、彼は猶少しく語を進めた。

『僕は僕よりもつと多く天分を持つて居る人達が極く稀にしか其の作を演奏して貰へないで、其れを出版して貰ふ事は猶一層稀なのに自分の下らない曲で金を儲けるのを時々可成り下等だと思ふ』とローナルドは續けた。そしてブライアンの方を向きながら云つた。

『君はたつた今作曲で金を儲けたいと云つたね。儲けたくない者はありやあしない。ところでだ、君にもつと單純にもつと獨創的なところを尠く、小規模に書けと忠告したら僕は馬鹿だらう。君はとてもさう出來つこないだらうから、それは馬鹿氣て居る

んだ。いいや、君は自分の救ひを働き出さなくちやいけない。それは待ちさへすればいいんだ。今に成功するだらう』

一二ヶ月後、我々はサウスポートで逢つた。當時僕は一音樂雜誌のためにローナルドに關する文章を書いた。此の文章に就て彼は大變うれしく讀んだ事を述べた。彼は小學校の生徒のやうにそれに就て嬉しがつて居た。そして自分に就て僕がこんな好意ある事を正直に云ふ事が出來たのに就て驚きをあらはした。

『賞められるつてのはいいもんだなあ。僕はいつ迄でも賞讃で生きて行けるだらう。』

それから卷煙草に火を點けて、彼は附け加へた。『僕がこんなにそれの好きなわけは、多分ほんたうに自分がそれだけの値打ちがあると感じるからなんだ』

笑ふのは僕の番だつた。

『でも、僕はそれを感じるんだよ。若しさうでなかつたら、僕は、自分と自分の作に就てあんな恐ろしく深切な事を云ふ君にしろまた外の誰にしろ憎むこつたらう』と彼

は抗辯した。

一二ヶ月後、彼は其のどこかで見た僕の或る作品に就て熱心に溢れた長い手紙を寄越した。そして次ぎの週、倫敦で彼に逢つた時、僕は彼の濃厚すぎる賞讃に對して反對した。

『君は僕がすこし詐欺師だと思つてるに違ひない』と彼は云つた。

『どうも思つてるやうだ』と僕は答へた。(何故なら、實際に殆んど總べての玄妙な頭の良い藝術家には詐欺師の分子があると僕は思ふ。)

『よろしい、ぢやあ』と馬鹿らしく傷けられて彼は叫んだ。

『僕のいふのは、君が誰かを好くとすると、君の判斷が直ぐに其の肩を持ち過ぎるといふ意味だよ』

『そんなら君は僕が君を好いて居ると思ふのかい?』

『たしかに思ふ』

『さうか、君の思つた通りだ。けれど、まつたく、ほんたうに僕を詐欺師とはほんの少しでも呼んでは、いや思つてもいけないぜ。君は僕の事を短慮、淺薄その外さう云つた風などんなひどい言葉で呼んでもいいが……然し「不誠實」は！だつて、誠實は僕の持つてるたつた一つの德なんだもの』

そして僕は彼が自身さう信じて居たと信じる。けれど誰が誠實か？　尠くとも或る瞬間を除いて誰が誠實か？　藝術家である我々のすべては、刻々の情緒に左右されて始終あちこちへと搖られて居るのではないか？　我々は今一つの事を云ひ、而かも一時間後に全然反對の事を意味するではないか？　我々は熱心のために間違つた位置に追ひやられ、其の刻の氣持が强ひるために虛僞の言葉をぺらぺら用ひないか？

僕は四年間ランドン・ローナルドに逢はない。けれど過日其の指揮するのを聽いた。そして僕は彼の表出の中に以前屢々氣の注いた至上の性質を認めた。彼自身は其の作品のやうだ――それは閑雅で、鋭敏で、情緒的で、流動的で、烈しいのだ。彼の心は、電光のやうな素早さで働く。彼は君がそれを云はうとする途端に君の云はうとする事を知る。そして彼の人格の上には、我々の呼んで天才といふ魔力が常に低徊して居る。

三人の英國作曲家

グランヴィル・バントック――ジョセフ・ホルブルック――
シリル・スコット

グランヴィル　バントック

現在、英國の創造的音樂上死活的の重要さを持つて居るのは僅か二つの名前卽ちサー・エドワード・エルガーとグランヴィル・バントックとだ。凡そどんな二人の人間でも此の二人以上に激烈な對照を作る事は出來ない。エルガーは保守的で、貴族的見解に思ひ昂り、上品過ぎ、深く宗敎的なのに、バントックは民主的で、ラベレイ主義者で、自由思想家で、素晴らしく人間的だ。

二人を比べると、バントックの方がより獨創的で、より深い思想家で、より廣く同情的だ。

アーネスト・ニューマンのところで、或る土曜から月曜へ掛けて過しながら、彼に一夕モーズレイのバントックの家に連れて行かれたのは、十年ぐらゐ前に相違ない。僕は、其の「オーマー・カイヤム」の第一部を作曲して居たテーブルから立ち上つたバントックの大きな身體を覺えて居る。そして僕は、握手を交はすや否や、彼が其のポケットから澤山の入れどころのゐる、まるで手風琴のやうに閉められた馬鹿に大きな葉卷入れを取り出したのを思ひ出す。もう一つのポケットから、彼は普通火を點けるのに用ひられる木片の大きさに垂んとする程のマッチを入れた大きな箱を取り出した。それから僕のために念を入れて一本の葉卷を撰んだ後、彼はマッチを擦つた。それは花火のやうにパッと燃えて、やがて大きな焰に鎭まつた。彼は僕が火をつけて居る間ずつと、非常に嚴肅に、寧ろ批評的に僕を見詰めて居たが、僕が葉卷を其の焰の中に突込んで、何秒か其儘にし、葉卷其の物も一瞬間燃え上つて、やがて小さな爐のやうに眞赤に成つた時、其の顏は微笑に和らいだ。

僕はバントックの葉巻の非常に澤山を吸ふやうに運命づけられて居た。そして僕は戰爭の終つた時、更に澤山吸ひたいものだと思ふ。然し僕は彼の手渡す葉巻に火を點ける時、ちやうど此の神聖な儀式のどこか細かい點をしくじりはしないかと氣づかふもののやうに、彼が至極凝つとまた少しばかり心配さうに僕を觀察して居るのに氣づかなかつた事はなかつた。僕は一度もしくじつたとは思はない。何故なら、彼は僕に會つて葉巻をすすめない事はなかつたから。それは若し僕がどれか點火の儀式の必要な定則を略したのだつたら、彼はたしかに呉れなかつたらうからだ。

其の始めての晩、我々はいろいろの話をした。尠くともニューマンと幾人かの他の友達はした。が、いつでも決して多辯でないバントックはほんの一般的の事以外にはまるで口を開かなかつた。其の生活の樣式にかけては注意深い人といふわけではなかつたが、友人の選擇にかけては彼は注意深かつた。そして其の性に合はない連中とぶつかり合はされた場合、彼ぐらゐ直ぐ冷たく成り得るものはない。我々の小さな集まりの中には幾人かの見知らない人が居た。そしてバントックは大部分、安樂椅子に凭れ掛つて、聞いて居る事に滿足して居た。

翌晩、我々は、アーネスト・ニューマンが其の諧謔に富んだ見事な講演を行つたバーミンガムのミッドランド・インスティチュートで再び會つた。どういふわけだか知らないが、バントックは僕の演壇に座る事を迫つた。それは、目立つた位置に、羞かみやの自覺を持つた者を置かうといふ彼の惡戯好きの天性を滿足させるためだつたとしか思はれない。其の當時、彼とニューマンとは友人中の最も親密なものだつた。そしてニューマンと僕とが仲がよかつたので、バントックは僕を非常に好意を以て眺めるやうに傾かされた。兎も角、其の晩別れる前に、彼は、僕を事實上嫌つて居ないといふ事を充分明瞭に示した。何故なら彼は僕の差支へのない時はいつでも土曜から月曜に掛けて訪ねて來ないかと誘つたから。其の時以後ずつと、彼の家で、マンチェスター、倫敦、レキサム、グロウスター、リヴァープール、バーミンガム其の他到るところで僕

は度々彼に逢つた。

やがて、一週間置きの土曜日毎に、バントックが其の管絃樂を指揮したフィルハーモニック・ソサエティーの午後の練習と夕方の演奏會とに列するため、マンチェスターからリヴァープールへ行くのが僕の常例の仕事に成つてしまつた。此等の集會は非常に愉快なものだつた。それは我々の仲間がロンドン・アンド・ノース・ウェスタン・ホテルに泊るのを慣ひとして、日曜の夜明け迄音樂を語り合ひ、其の日の午後に夫々の家へ歸るのを例としたからだ。此等の時にバントックは其の極上の狀態にあつた。そして彼の此の極上は世の中での最も良い話し仲間を作る。彼の前では誰も溫かく、また心から愉快に感じながら、而かも猶大變、生き生きして居る事を感じる。彼は熱を作つた。彼は人の氣分を融和させた。僕は彼を燦然たる辯舌家乃至うまい辯舌家とさへ呼ぶまい。けれど僕は彼を非常に賢明な辯舌家だと呼ぶ事がほんたうに出來る。そして議論に掛けては、彼は間然するところが無い。

*　*　*

僕はバントックの指揮を聽きに度々リヴァープールへ行くのを例としたが、それは僕が彼を指揮者としての大藝術家だと思つたから行つたのではなかつた。此の方面の彼の能力に就ては疑ふ餘地もない。けれど彼が表出上の天才であるといふ事は、一流の批評家なら誰も主張しまい。いや、僕をリヴァープールへ引つ張つたのは、バントック自身の人格と、彼が曲目の中に加へた新しい近代の作品とだつた。當時のバントックは殆んど情熱的に近代主義者だつた。恐らく輿論に依つて（けれど、恐らくは委員團に司配されて？）彼が其の演奏會の一つにベートーヴェンの交響樂を加へなくては成らないのを感じた際、彼が如何に時として不機嫌な振りをしたかを僕は面白味を感じながら覺えて居る。

一度などは、僕はリヴァープールのライム・ストリート・ステーションで彼に逢つたが、其の時彼は、ばらばらの譜の束を携へて汽車から出て來た。

『持つて上げませう』と僕は云つた。

彼は持つて居た中での一番嵩ばらない、一番輕いのを選んで僕に渡した。

『君はいつでも良い兒だ、カムバーランド君、此れを持ちたまへ。中での一番重いやつだ。ベートーヴェンの第五交響樂。實に持つて歩くだけでも咽喉が渴く程重たくて、乾燥無味だ』と彼は嘆息した。『君は幾度それを聽いたかね？』

けれど、彼が僕の口の中に葉卷を突込んで居たので、それがちやんと火の點く迄僕は返事が出來なかつた。

『尠くとも五十度か六十度。いやそれ以上だ！ざつと一年八度として十五年間だから——百二十度ですな』

『うむ、いつでも良い兒で、おまけに辛棒强い』と彼は獨語した。

『僕は汽車の中でわの交響樂を片附けなくては——うむ、片附けなくてはだ——ならなかつたんだよ。そうして僕は片附けると云ふ事は何の樂しみにもならない事をするのだと決めて居るんだ。そんな事を云ひながら、僕は忘れないうちに此れを出さなくちやならない』

彼は其のポケットからすべてアーネスト・ニューマンへ宛てた幾枚かの葉書を取出した。此等の葉書は著るしく彼を面白がらせたやうだつた。そして彼は微笑しながら僕に其等を渡した。それは十二枚程あつたが、どれもこれも work と云ふ字の各種の組合はせを持つて居た。即ち KROW, WROK, ROWK, RWKO などといふやうな具合に。

『先生は明日の朝のイ便で此れを受け取るわけだ。そこで若し此れが先生を床から飛び出させてブライトコフ・アンド・ヘルテルのための僕の「オーマー・カイヤム」の解說を書き上げさせる事に成功しなければ、何をしたつて駄目だらう』とバントックは說明した。

ニューマンがいつも勉强する時は非常に勉强するくせ、一般には精々急き立てられ

なければ仕事をしない人だといふ事實に依つて、冗談の要點が加へられた。

＊　＊　＊　＊　＊

其の青年時代にバントックは自身の好みといふより、事情がさうした結果、可成り東洋を旅行した。而かも僕はよく東洋が彼の天然の故郷だと感じる。彼が東洋の言葉に親しいのかどうかは知らないが、彼はさうだと其の友達の考へるのを確かに好いて居る。そして僕のところへ寄越した其の手紙の多くは波斯や支那のものではないかと思はれるやうな字で書かれた拔萃だの奇拔な言葉だのを含んで居る。けれど、バントックは其の友達を手柔かに擔ぐのを何よりも好いて居たから、此等が「僞造」されたものである事を知つても僕は少しも驚かないだらう。

然し、彼は東洋の人々の先見を持つて居ない。彼の熱心は彼を極端と金錢上の贅澤とに追ひやる。彼がバーミンガムの郊外の、廣い林に成つた庭のあるブロードメドウの家に住んで居た時、彼は球根熱に浮かされて居た。そして僕は、花さふらん、喇叭

咲水仙、黄水仙、それから普通の水仙の球根で其の床の掩はれた厩を彼が見せたのを覺えて居る。

『ですが、此れはもうずつと前に植ゑなくちやいけなかつたんですな』と僕は抗辯した。

『承知だ、承知だ。だが園丁がどうも忙しいんでね。まだここにあるんだ』と彼は悲しげに云つた。

彼の哲學上の見解は、概して東洋の哲學に依つて指導されて居る。彼は人の目をくらます事を嘆賞して、自身多量に此の性質を持つて居るのを信じる事に、美しい、子供のやうなよろこびを持つ。けれど事實に於て、彼は人を欺き得ない。彼の骨牌の手品にしても、素人くさい。そして其の將棊は一寸やるといふぐらゐの程度だ。

其の將棊に就て、僕は幾年か前一人の將棊好き——惡い骨頂の厄介者——が、勝負をしに定まつて彼を訪ねて來て夜の非常に更ける迄居るのを例とした事を覺えて居る。

此等の訪問はやがてやり切れなく成つた。そして、一夕、バントックは癇癪を起してジリジリしながら其の相手と對座した時、此の迷惑至極な事に鳧を附けてしまはうと決心した。

『一寸失禮、葉卷の箱を二階に忘れたので。煙草を吸はないと實際駄目なんです』

彼は部屋を出た。そして眞直ぐに寢臺へ行つてそして眠つた。次ぎに彼が其の客に逢つた時には、お互ひにただ頭を下げただけだつた。

バントックは非常な悅びで此の話をするのを常とした。そして時の經つうちに話は素晴らしく大袈裟に成つた。それは敍事詩的に成つた。如何に彼の客が『バントックよ、バントックよ、身共はそなたの女皇を取つたぞよ』と呼ぶのが聞えたかとか、如何に奇妙な物音が暗い部屋の中から發したかとか、また如何に翌朝、一晩をまんじりともせずに過した客が、盤の上の駒の動きの或る手の效果を試みながら、ちやんと起きて居るのが發見されたかといふ事が語られた。物が三度云はれた場合には、勿論それはほんたうだ。けれど、バントックはすつかり同じ話を三度するためしがなかつた。彼は不變といふ事が愚鈍な者の避難所でまた慰安だと信じて居ると僕は考へる。

ジョセフ　ホルブルック

その全くの頭のよさと、勞作に堪え得る力と、理智的の精力とに依つて、ジョセフ・ホルブルックは我が作曲家達の間に其の比を見ない。彼の事を僕に最初語つたのはニューマンだつた。そして此の異常な天才に逢つて見たいと僕に思はせたのもニューマンだつた。

ホルブルックの短所は――僕はそれを短所だと思はないが――彼の喧嘩好きだ。彼は今迄に幾度となく批評家と戰つて居る。そして、ホルブルックは、其の仲間と戰ふ事に依つて自分自身を時たま害なつた事を僕よりよく知つて居るに相違ないが、多くの場合に、英國音樂のために、それは至極の結果を擧げて居る。譴責された批評家は、

彼を譴責した手に依つて作り出された新しい作品に對して公明な不偏な批評を書きつこないやうな人間だ。然し、單に批評家ばかりがホルブルックの嘲罵の笞を感じたのみならず、指揮者、音樂團體、或る非常に隆々たる所謂作曲家、委員團、出版業者、そして、實際、樂壇で力を持つて居る殆んどどんな種類の人でも彼にやられたのを感じた。

けれど、若し彼が文章に巧みでまた機智に富んで居るといふのなら、彼は其の座談に於て、より以上に巧みでまた機智に富んで居る。僕は、彼と過した或る日曜の事をいつか忘れるだらうとは思はない。それは其の日の午後に彼の絶倫な精力のために僕の頭がへとへとにまた身體がぐたぐたにされてしまつたからだ。彈いて居ない時には、彼はしやべつて居た。そしてまるで其れが地上で過す最後の日ででもあつたやうに其の兩方をやつた。其れ程彼の辯舌は熱心で痙攣的で、其の彈き方は猛烈だつたのだ。

恐らく、彼の最も目覺しい性質は其の精神集中の力だ。僕は彼がロード・ホワード・

ドゥ・ワルドゥンと地中海でヨットを浮べて居た時、今の時代に書かれたものの中での最も燦然たる、また最も不思議に異しい音樂の幾らかを含んで居る歌劇「ディラン」の作曲に從つて居たといふ事を話したのを覺えて居る。此の歌劇を作曲した際彼は靈感を得た時にでなく（何故ならば、アーノルド・ベンネットのやうに、彼は靈感を信じないから）さうする以上に刺戟の多い、乃至必要な事のなかつた時にそれを行つた。たとへば、彼は朝のうち仕事を始め、晝飯の時に、欣然と、惜氣もなく其のペンを擱き、食事が濟むと直ぐ其の作曲に戻つて、書きかけて置いた其の部分から何の躊躇もなく再びやり始めるといふ風だつた。普通の創作的藝術家の怒りを起した邪魔は少しも彼を煩はさなかつた。彼は部屋の中で激烈な議論の行はれて居る時絶對に靜かな部屋で出來ると全く同樣に落着いてすらすらと仕事をする事が出來る。實際、音樂は彼から流れ出る。そして若し其の頭腦を力なく、其の精神を鈍くする氣分が起るとしても、僕はそれが一日か二日以上に續くとは思はない。

彼の作つた音樂のほんたうに莫大な分量のうち、僕は、殘念な事に極く一部分しか知らない。そしてそれは主として彼がエドガー・アラン・ポーの影響を受けて居た、其の極く初期の時代に屬するものだ。ポーは彼の精神的相似だ。そしてホルブルックの「アナベル・リー」の作譜は、美しい、人の心を魅し去る詩其のものよりも、一層美しく一層人の心を魅し去る。

僕はホルブルックを喧嘩好きだと云つた。そして數年前、僕は——それは非常に彼を面白がらせ悅ばせたと思ふのだが——彼を音樂上の怒りつぽい海燕と呼んだ。けれど、何が彼を怒りつぽくするのか？　彼がさう迄、頑固に攻擊する我が音樂生活の缺點は何なのか？先づ第一に彼は無能、特に公の無能と竝びに巨額の金を作る無能を憎む。彼は藝術上の商賣氣を憎む。僕の云ふ藝術上の商賣氣といふのは、金儲けを唯一の目的として藝術を利用するいろいろのもくろみを意味するのだ。彼はつまらないものを出す出版者を憎み、下らない事を書く批評家を憎む。彼は其の天分ある儕輩のあも多くが、全然世人に認められないで居る事を憎み、自分の國で書かれて居るものに劣つた外國の音樂に對する英國好樂家の愛好を憎む。そして、彼は其の批評家達の使用するために新聞の主筆達に演奏會の無料切符を贈る制度を嫌つて居ると僕は信じる。

然し、ホルブルックの喧嘩好きの事ばかりこんなに長く書いて、僕は彼のほんたうの性格の寧ろ一面觀ばかりを述べて居る事を感じる。何故なら、彼は憎惡の塊ではないのだ。まつたく、彼ぐらゐ其の競爭者と見做さるべき人々を賞讃して書いた作曲家はないと云つてもほんたうだ。彼は後進の人々の作品を研究する事に熱心でまた素早い。そして其の作品のどれかが意に叶つた時には、いつもそれを公開の席で演奏するか、それに就て新聞に書くかする。

僕は彼がつむじ曲りだとか、信じ難いとか、無分別だとか、其の他澤山の不愉快な言葉で呼ばれるのを耳にした。彼はさうかも知れない。然しホルブルックは天使では

ない。彼は天才を邪魔し、麻痺させやうとする狀態の下で仕事をして居る單なる天才の一作曲家なのだ。

シリル　スコット

シリル・スコットは最も纖細な訴へを感じる心にのみ感應し得る種類の絶妙に洗練された心を持つて居る。彼は其の搖蕩する、かぐはしい「蓮花」のやうに恐らく少し異國的だ。何年も前に、僕は彼の音樂を知り始めた。そして戰爭前の時分には、彼の作品の或る物を彈かずに一週間を過した事は至極稀だつた。たつた一度、僕は彼と同席させられたが、その時でさへ、椅子に落着かないで掛け、稍激しい口調で語つた、幾分興奮して居る、そして僕には異常に興味のあると思はれた人の素性に僕は氣が附かなかつた。彼は其の理想に依つて容易に運び去られる、――理論が無用で、事實が塵芥よりも惡い世界に運び去られる人として僕の心に印象をとどめた。

大田黑元雄

シャリアピン

先づよかつた。シャリアピンが過激派に暗殺されたと云ふ噂さは誤りだつたらしい。シャリアピンは唯其の管理して居た歌劇場を過激派政府のために沒收されただけの事だといふ話だ。尤もそれも唯、話といふのにとどまるのだけれど、シャリアピンの現に生きて居るといふ事だけは確實のやうだ。

我々は此の間西比利亞から來た歌劇を見た。それは貧弱極まる一座だつたが、それでも彼等はムーソルグスキイの「ボリス・ゴドゥノフ」を見せて呉れた。そして私は其の時主人公を歌つたホホロフといふ歌手を聽きながら、事新しくシャリアピンの偉大さを感じた。

シャリアピンの藝術に私の初めて接したのは、千九百十四年六月一日の事だつた。

彼は其の晩、「ボリス・ゴドゥノフ」に、云ふ迄もなくボリスを歌つた。そしてムーソルグスキイの音樂の驚くべき感銘の深いものだつたと共に、彼の藝術も亦忘るべからざる卓越したものだつた。其の後私は「暴帝イヴァン」のイヴァン帝と「イゴル公」のガリッツキイ公とコンチャク汗とに扮する彼を見た。

「暴帝イヴァン」の晩に、私は年若い英人の隣りに席を占めたが、彼は中々の好樂家で毎水曜日の晩（オルダーショットと云ふところに住んで居る彼は、水曜日が終列車の時刻が遲いために好都合なのだと語つた）此の劇場――ドゥルーリイ・レーン座――へ來る事にして居ると云つて居たが、シャリアピンを見たのは此の晩が初めてだつたために、頻りと此のやうな藝術家を歌劇の歌手の中に見た事が無いと賞揚して居たのを今に記憶して居る。

實際シャリアピンは珍らしい藝術家だ。伊太利人の歌劇ばかりを見慣れて居る人達は、ムーソルグスキイやボロディンの音樂に愕かされると同樣に、彼の演奏にも亦愕かされるに相違ない。

シャリアピンは歌手と俳優の兩者だ。而かも其のいづれにも彼は卓越して居る。彼は優れた歌手であると共にまた優れた俳優なのだ。

フェオドル・イワノウィッチ・シャリアピンは千八百四十三年二月十三日（あのカルーソーは同年同月の二日の生れだ）に露西亞のカザンに生れた。彼は農民の出だ。そして彼も亦當時の一般の農民と同じく、幼い時から貧困と闘つてまた種々の勞働に就いた。そして此の放浪生活中にゴルキイと親しく成つて、二人とも歌手に成らうとしたところが、ゴルキイは肺の疾患のために斷念した と云ふ話がある。（諸君は或ひは彼がゴルキイと一しよに寫つて居る寫眞を見た事があるだらう。）兎に角シャリアピンは勞働して居た。然し彼は歌手と成る希望から音樂を自修して、十七歳の時、田舍廻りの喜歌劇團に投じた。けれども彼は充分な給金を貰ふ事が出來なかつたため、屢々停車場の赤帽などをしてパンを得て居たらしい。其の後彼は高架索の方へ赴く旅廻りの

劇團に加はつた。けれど彼の方にやつと運の向いて來たのは千八百九十二年の事だ。其の年ティフリスでウーストフといふ歌手が彼の歌ふのを聽き、幾らかの稽古を與へた後、歌手としての約定を彼のために得て呉れた。

ロザ・ニューマーチ夫人に從へばシャリアピンの初めて歌劇に出演したのはグリンカの「皇帝に捧げし命」で、ヴァン・ヴェクテンのノートに依ればグーノーの「ファウスト」だ。いづれにせよ彼は千八百九十四年中、ペトログラードの二つの劇場で歌ひ、翌年にはマリンスキイ座に雇はれた。けれど恐らくシャリアピンは最初から獨創的だつたのだらう。此の歌劇場の管理者は後年偉大に成つた青年の眞價を認め得なかつた。それがために彼は餘り度々出演するのを許されなかつたといふ事だ。ところが其のまた翌年法律家のママントフといふ音樂好きの富豪が自ら破約の償金を支拂つた上、帝室歌劇場から、モスカウにある自分の歌劇團に、彼を招き入れた。シャリアピンが其のほんたうの技倆を示し始めたのは此の一團に加はつてからの事だつた。彼は忽ち公

衆の偶像と成つた。そして熱心な好樂家等は彼を見るために、ペトログラードからモスカウ迄通つたと云ふ事だ。其の後のシャリアピンは愈々其の名聲を揚げた。そして千八百九十九年には一年の給料六萬ルーブルの約束でモスカウの帝室歌劇場に現はれるやうに成り、其の後彼は歐洲の首府を始めとして、北米並びに南米へさへ赴いた。

一昨年の夏ブロコフィエフと話した際、其の談片に彼が去年の四月頃ペトログラードで演奏會に出演したといふ事があつたくらゐだから、彼は革命後も其の故國で歌つて居るのらしい。そして勿論相變らず歌手として高い地位を其の國に保つて居るものと思はれる。

（二）

舞臺の上のシャリアピンは先づ其の堂々たる風貌を以て、人に深い印象を與へる。實際彼は其の登場に際して、一樂句をも歌ふ前に、聽衆の心を惹きつけてしまふ。彼

は其の多大の注意を拂つて居る扮裝と表情とに依つて或ひはボリスに或ひはコンチャク汗に成り切つてしふのだ。

シャリアピンの得意とするのは凡俗以上の人物だ。それは片々たる市井の人物ではない。偉大にせよ、奸惡にせよ、粗野にせよ、また暴虐にせよ、とに角凡俗以上の人物なのだ。

彼のボリスと暴帝イヴァンとは忘れ難いものだ。彼の演技は飽く迄も現實的だけれど、人に反感を與へない。それはどこ迄も眞摯の氣に溢れて居る。

シャリアピンは歌手として見事な低音を持つて居る。彼は所謂聲樂教育を受けた事は殆んど無いと云ふ事だけれど、其の天賦の能力と、其の巧妙な運用に依つて、一流の歌手と成つてしまつた。(彼の聲の見事さはヒズ・マスタース・ヴォイスのあのがさがさしたレコードからでも明らかに想像し得る。)彼は時として素晴らしいフォルテを出す。けれども彼の長所は、メッサ・ヴォチェの部分にあると思はれる。此れはロザ・ニューマーチ夫人の著書の中に引用されて居るハーバート・ヘイナーの書いた次ぎのやうな一節に依つても明らかだらう。

『シャリアピンの歌ひ方は特にメッサ・ヴォチェの部分に於て美しい——何人もあのやうな立派なベースの聲を持つて居る歌手に其れを豫期しないだらうけれど——そして其れは彼の演出上の最も效果ある特色である。そこには聲音上の效果に就て決して何等の努力もない。彼の聲は常に臺詞に附き從つて居る。……彼の唱歌法はまつたく深い呼吸の仕方に立脚して居るのだ。そしてそれがあのやうに見事なカンタビレの結果を產む。すべての聲樂の學生は此の偉大な歌手を聽いて、其の藝術から多くを學ぶべきである。』

シャリアピンの俳優としての一面に就て記せば、それは前に云つた通り、非常に現實的だが、人に反感を與へない。其の性質に於て相違はあるもののカニオの惱みを現はすカルーソーとボリスのそれを現はす彼とを、またロドルフォの愛人の死に對する

悲嘆を現はすマッコーマックと、暴帝イヴァンの己れの娘の死に對するそれを現はす彼とを、夫々舞臺の上に比べて見た人は、誰しもシャリアピンの演技の卓拔な事を感じないでは居られなかつたらう。

『或る役を歌ふ場合には、私はもう其の役の人物でシャリアピンではない。だから私がする事は、何でも其の人物に相應した事でなくては成らないのです』と彼は嘗て人に語つたと云ふ。彼はよく此の言葉を實現する。其の代りに彼は獨特の見解で其の役割を演出する。それがために彼は時として批難を招く。彼が嘗て紐育で演じた「セヴィラの理髪師」のドン・バッシリオは其の例だ。それはまつたく彼が自己の見解から此の西班牙の僧侶を餘りに汚ならしい、粗野な男として演じたためだつた。

けれどシャリアピンがただ徒らに自己の見解のみに據つて居るのだと思つたなら、それは大間違ひだ。彼は其の役割に就て單に樂譜上のみならず、文學、歴史、美術等の夫々に依つて研究を積む。此の點に關して、ロザ・ニューマーチ夫人は其の「露西亞歌劇」の中に次ぎのやうな事を記して居る。

『シャリアピンは其の役割に對する見解を作り上げつつある間、傳統や、一般の意見には動かされないが、其の表現上の現實味を高めるための附屬した研究を等閑視しない。其の思ひの儘に蘇る其等の時代の歴史の中に彼が深く沒頭して居る事を認めずに、彼のボリスや暴帝イヴァンを見るのは不可能な事である。同樣にあのリムスキイーコルサコフの歌劇の最後の場でのオルガの死骸を前にしたイヴァンの狂ほしい悲嘆を演ずる彼と、亂心から起つた激怒に驅られて殺してしまつた己れの息子を其の腕に抱いて居る露帝を描いたレピンの恐ろしい繪とを比較した人のすべてが同意しなくては成らないやうに、彼は露西亞美術の傑作を研究して、良い效果を擧げた。……』

シャリアピンは「傳統の敵」と自稱して居るさうだ。けれど彼は「傳統の敵」たる事に成功するため、此のやうな天分と努力とを費して居るのだ。此の點に於ても亦彼は歌劇壇隨一の藝術家だ。

(三)

私人としてのシャリアピンは磊落な卒直な子供のやうな男らしい。そして彼は偉大な體軀を持つて居る。紐育の批評家ビッツ・サンボーンが彼を "doux géant" と呼んだといふのは、誠に當つて居ると思はれる。彼の卒直は時として誤解を招くやうだ。彼が或る人々から傲慢と思はれ、若しくは思はれたのは、まつたく此の卒直に過ぎる結果だらう。

シャリアピンに關する文學上の肖像は其の數が極く尠なく、私の知つて居るところでは僅かに二つしかない。一つは前に擧げたロザ・ニューマーチ夫人の「露西亞歌劇」の一節で、他はヴァン・ヴェクテンの「インタープレタース・アンド・インタープレテーションズ」に載せられたものだ。

二つの中では無論後者の方が興味がある。ヴェクテンの筆はシャリアピンに就て、

メリイ・ガーデンやオリフェ・フレムシュタートを描いたもの程潑溂としては居ないが、而かも猶、讀む人を充分に喜ばせる。

彼は此の一文の中に、シャリアピンが如何に無邪氣でまた健啖だつたかを書いた。それによるとシャリアピンは斷えず而かも多量に飲み且つ喰ふのを常として居るらしい。ヴェクテンは彼が紐育のホテルでシャリアピンとの對談に一日を過した際、此の大歌手が六杯の玉葱のスープから始めて、多量の食物や飲料を平げ盡したのに驚かされたさうだ。そして其の日、喰ひ且つ飲むに從つて益々其の調子の陽氣に成るのを例とするらしいシャリアピンは、到頭自分の「マルセーユ」のレコードをヴィクトロラに掛けて、それとユニゾンで歌ひながら、レコードの聲を歌ひ消す事に成功したといふ事だ。

また子供らしい一例として、同じ筆者は、シャリアピンが南米から歸つて來た時、巴里のホテルの一室に猿や、一種の鰐魚や、美しい翅を持つたいろいろの鳥を運び込

んでそれを動物園に變ぜしめたといふ事を記して居る。

シャリアピンは確かに粗野な半面を持つてゐる。そして此の點に於ても彼はまた純然たる露西亞人だ。而かも彼はその完成に多大の苦心を拂つた己れの藝術に就て、飽く迄も、藝術家的の自信を持つて居る。彼が千九百七年から八年へ掛けての紐育のシーズンに演じたメフイストフェレ（ボイートの歌劇の）や、ドン・バッシリオ等に對して受けた批難に對する彼の意見は、其の卒直な點に於て、また其の確固たる點に於て、よく彼の藝術家としての面目を躍如たらしめて居る。彼の次ぎのやうな意見は、ヴァン・ヴェクテンを通じて、當時、紐育タイムス紙上に掲げられた。

『紐育の音樂批評は深くない。優れた批評家に成るのは世の中でのむづかしい事だ。私は歌手だ。けれど批評家は私を單なる歌手として視る權利は無い。卽ち私の演技、扮裝其の他のすべての事を觀察すべきだ。そして此等すべての事を理解し、また知つて居なくては成らない。

歌劇は定まつた藝術ではない。それは音樂、詩、彫刻、繪畫、建築ではなくて、其等すべてのものの結合だ。だから歌劇を觀に行く批評家は此等の藝術を皆研究しなくてはいけない。但、此等の研究は最も大切だが、其の外にまだ研究で得られないものがある。それは理解する精神だが、これは天性のものだ。

私は職業的批評家ではないが、成らうと思へば成れたらう。私は音樂家や、美術家や、文士などと交際して居るので、此等の藝術に就て多少知つて居る。其の結果批評を讀むと私には其の中の當つて居る事と、間違つて居る事とが一目して解る。

此の劇場（メトロポリタン歌劇場）の指揮は、すべて因習ばかりを信じて居る。そして新しいものは何でも恐れて居る。だから何も運動がない。從つて新しい作を上場する元氣がなく、歌手達は皆古い役割に獨創的の見解を與へる事を禁じられて居る。

紐育は巨大な煮えくり返つた實業の地獄だ。何でも實業萬能だ。だから此の都會の人達は漸く晝間の仕事が濟むと疲れ切つてしまふため、唯一寸した娯樂の後に眠らう

とする。研究などはまるでしようとも思はない。そして非常な感動を受けたいなどとは望まないのだ。其の結果いつまで經つても「ルチア」や「ファウスト」で滿足して居る。

然し、歐洲では違ふ。そこでは人々が新作を望んで居る。そして新作の上場に非常な興味を持つて居るのだ。古いものを好むのは差支へない事だけれど、生命のある新作を見るのは猶大切ではなからうか？……』

けれど此れは決して徒らな豪語ではない。事實、シャリアピンは古い役割に獨自の表現を與へて此れに新しい生命を盛ると共に、また近代の作品に著るしい興味を抱き、ラハマニノフの「アレコ」やグレチャニノフの「ドブリニア・ニキティッチ」のやうな作をも其のレパトリイの中に加へて居る。

平和の日は來た。シャリアピンのあの深い聲が、倫敦や巴里の歌劇場に響き渡る日の再び來るのも遠い事ではないだらう。

アイクハイムと語る

私は此の章に米國の音樂家ヘンリイ・アイクハイムとの會話を記す。それは此れが確かに我が好樂家等に興味と教訓とを與へるところが尠くない事を信じるがためである。アイクハイムに就て彼の何人であるかを知らない諸君のために私はここに説明を加へて置く。

彼はボストン・シムフォニイ・オーケストラのヴァイオリニストとして二十餘年の經驗を有する以外、藝術上の新運動に對して深い且つ正しい理解を持ち、幾多の近代樂曲の傑作を卒先して米國に紹介するために活動して今日に至つて居る人である。彼はまた作曲上の天分にも乏しくない。そして彼は一面寫眞の大家として米國の好事寫眞家中に頭角を現はして居る。私の次ぎに記す會話にあらはれた彼の觀察――特に日本に於ける西洋音樂の進歩其の他に對する――には首肯すべき點が極めて多い。彼はもう五十を越して居るであらう。而かも其の心は飽く迄も潑溂として居る。彼は實に教養ある紳士である。そしてまた彼の夫人は彼の妻たるに相應はしいレディーであると同時に、好箇の洋琴家である。彼等は實に親しみ易い。彼等はたしかに稀に見る藝術的に一致した夫妻のやうに思はれる。

私が此のやうな説明を加へたのは、まつたく私の此の一文が彼の印象記ではなくて、唯其の意見を紹介するためのものであるからに外ならない。

大正八年十二月十四日の晩、私は友人と帝國ホテルに米國のヴァイオリニスト、ヘ

ンリイ・アイクハイムを訪ねた。私達が行つた時、彼は夫人と食堂に居た。そして私の姿を見ると彼はナイフを置いて高く手を揚げた。

寫眞の大家としての彼は、其の夕、小西で寫眞の技術、特にオイル・プリントのそれに就て講演して來たのだ。そしてすつかり草臥れてしまつたと云ひながらアスパラガスを喰べて居た。やがて私達の前にも珈琲が運ばれた。

『先達御主人の曲をお彈きに成るのをうかがひました』と私は夫人に云つた。

『あゝ、慶應で？　どうお思ひに成りました？』

『さあ、あの支那の曲の一部分がいいと思ひました』

『日本のは？　きつと日本らしく聞えませんでしたでせう？』

『いいえ、中頃のところは大變日本的でした。唯、あのスケールが調和しないやうです』

するとアイクハイムは口を入れた。

『あれはね、智思院で聽いた鐘のオーヴァー・トーンを出さうと思つたんです。それからあの中のメロディーは船の中で無線電信の技師が尺八で吹いて聞かせて呉れたのを使つたのです』

『尺八はいい樂器でせう？』

すると今度は夫人が答へた。

『ええ、ほんたうに。メランコリイで詩的で大層いいと存じます。主人も一つ持つてるんで御座いますよ』

『さうで御座いますか。あれは唯音を出すだけでも可成りむづかしいものです』

『然し、私には可成りな音が出ます』

アイクハイムはかう云つて笑つた。

彼は寫眞をうつす上に於て、東洋の非常に興味の深い事をいろいろ話した。それからまた日本の人達が寫眞の技術には巧みでありながら、構圖上の研究の足りないと思

はれるといふ事をも附け加へた。

其のうちに食事は終つた。そして我々はストーヴのあたたかい廣間の一隅に席を移した。アイクハイムが音樂に就て語り始めたのは、部屋で讀書するといふ夫人と我々が手を握つてから後の事だつた。彼は先づ口を開いた。

『私の聽いた範圍から云ふと、日本では聲樂家の方が器樂家より二十五年ぐらゐ進んで居るやうですな。私は東京でもう度々コンサートに行きましたが、今日の會(南葵樂堂に催された音樂學校の管絃樂の演奏會)にしてもさうです。どうも器樂の方は頭の惡い獨逸人の敎師に大變進歩を妨げられて居るらしい。其の證據に今日のオーケストラはどうです? 殊にあのコンダクターは? 日本人があんな男に音樂を習つて居る間はとても進歩する見込みはないですなあ。一體あの男はコンダクターとしてテムポ一つわからないぢやありませんか。遲くすべき時に速くしたり、速くすべき時に遲くしたりしてばかり居る。私は此の間の晩あの男のヴァイオリンを聽いたんですが、あの男の

低能なのに呆れてしまひましたよ。第一にあの男は音符の價値がわからない。いや實際あの男は音樂に對する觀念が無いんですな。それでなくてあんな指揮をする奴があるもんですか。いくら演奏者が下手だつてもう少しはどうか成る筈だ。たとへばあのオーボーのカデンツァですな。あのオーボー吹きが如何に下手くそな物のわからない男だとしたところで、コンダクターが少し注意して敎へればあわは成らないで濟みます。兎に角あんな低能の獨逸人に習つて居るのは愚の骨頂だ。あんな男はホテルの音樂家です。だから私はトクガワにも何故もつと良い敎師を雇はないんだと云つたんです。たとへばラハマニノフのやうなね。ところが金が無いのだといふから仕方がない。それにしても惜しいですな。日本人はたしかに技巧の上手な國民なのだから——それは日本音樂を聽いても直ぐわかる事です——ちやんとした敎師にさへ就けば、もつと、どんどん進歩するんですがなあ。音樂家は金に成るから日本には適かないんだ。文學者は世界中どこでも碌な報酬は受けないから、それでラフカディオ・ハーンだのチェ

ムバレンなんかのやうな偉い人が來て居たんです。ほんたうに二人共スーパーヴな人達だ！　私だつてもう十年若ければ日本に來て住みたいと思ふ。けれど私にしても日本で出す報酬ぢやあ御免を蒙りますからな』

『今日「タンホイザー」をうたつたお婆さんは如何です？』

『可哀想に、あんな年に成つて人の前でうたふのは、馬鹿氣きつて居ます。が、あの人はたしかに面白い人だと思ひました。あれはあのコンダクターとは段ちがひです』

『あの人はシェルデルップの妹なんです。若い時には可成り有名だつたんださうですが』

『妹？　さうでせう。きつと若い時にはよかつたのに相違ない。けれど今はもう……さうさうそれから此の間の晩、何とかいふ若い獨逸のピアニストも聽きました。若い縮れつ毛の男です。無論指は見事に動く。けれどそれつきりの話だ。あんな獨逸人は洋琴の製造家には良いかも知れないですがね』

『どうも日本では音樂學校の教師連が若い時分に獨逸で勉强したために、獨逸以外には音樂がないと思つて居るから大間違ひです』

『いや、音樂ばかりぢやない。どうです、建築だつてさうでせう。銀座へ行つて銀行や商店の建物を見れば直ぐわかる。あんな薄つぺらの獨逸建築の眞似をする必要は何にもないぢやありませんか。殊に屋根の出來の惡さは論外ですな。建築上眞似をするなら伊太利か佛蘭西のものを研究すべきです。それからまたオフィスのためだつたら紐育のが良い手本だ。あれは雄大です。何を苦んで、獨逸の而かも其の最下等の趣味を、日本のやうな藝術的の國が眞似するのだか、實に愚な事です。』

彼の云ふところは確かに當つて居る。それは私のいつも考へて居るところと同じだ。でも私は少しく說明をした。

『日本人が聲樂の方に多少進んで居るのは、歌といふものが相當な年に成つてから始めても出來るものだからだらうと思ひます。ところがピアノやヴァイオリンは小さい

時から始めなくては駄目ですからなあ。それを今のところ大抵相當な年に成つて音樂の好きなものが始めるのですからうまく成らないわけです』

『成程、それはたしかにさうですな。然し何しろ教師が惡くては見込みがありませんよ』

『實際、良い教師の居ないのは殘念です』

そこで私は話頭を一轉して、彼が過日慶應のホールで演奏したデビュッシイのソナタに就てたづねた。

『先達のデビュッシイのソナタはむづかしいものでせうなあ？演奏上の意味で』

『ええ、むづかしいものです。譜を見たところでは、誠にやさしさうだけれど、やつてみると驚きます』

『然し、いい曲ですね』

『實にいいです。私の考へではデビュッシイはワーグナー以後の大天才です。單に音

樂製作者としてはベートーヴェンと同等の天才です。昔からの作曲家の中で私のほんたうに敬服して居る天才の一人です。デビュッシイ、ワーグナー、リスト、ショパン、ベートーヴェン、バッハの六人がそれなんですが。リヒアルト・シュトラウスにも私は敬服して居ます。シュトラウスは確かにグレート・マンです。けれど私はシュトラウスの音樂は好きません。あれは曲藝師（ジャックラー）の音樂です。技巧には敬服の外ないけれど、デビュッシイのやうな純粋なところがありません』

『デビュッシイの作品ではいつのものがお好きです？』

『後期のものが良いと思ひますな。あのオーケストラの曲の「ロンド・ドゥ・プランタン」は一番の傑作でせう』

『ローレンス・ギルマンもあの曲を大變讃めて書いて居りますなあ』

『ギルマンはデビュッシイやレッフラーの事を隨分書いて居ます。さうして隨分見事に書いて居ます。私は三年前に初めて日本に來る迄はワーグナーの崇拜者でした。勿論

今でもワーグナーを世界最大の音樂製作家だとは思つて居ますが。ところが三年前に日本で能を見たのです。能は勿論初めには私にむづかし過ぎました。面を使ふといふ事が第一に初めての經驗だつたものですからな。けれど三度、四度と見るうちに段々其の味はひが解つて來ました。それからあの音樂ですな。あの世にも間の拔けたやうな音樂だ。けれど私はあれ程效果のある音樂を聽いた事がありません。あの太鼓が一つ鳴るでせう。するともう注意がすつかり舞臺へ吸ひつけられてしまひます。それからまた舞臺の上の人物がゆるりゆるりと身體を振りむける時に、あの馬鹿らしい笛がピューと鳴ると頭の毛が逆立ちに成るやうな感じを受けます。實際私は以前にデビュッシイがワーグナーを怪物(モンスター)だと云つて罵倒したといふ事を聞いて、デビュッシイが氣が觸れて居るんぢやないかと思つて居たんですが、能を味はつて、始めてデビュッシイの眞意がわかりました。それにしてもあの馬鹿らしい太鼓と笛が私のワーグナー崇拜をスポイルしたといふ事は一寸信じ兼ねる事だと思ひませんか?』

『いいえ、デビュッシイに云はせたらさうでせう』

『さうです。たしかにさうです。私はだから日本の人があまり歐洲の音樂にばかり溺れてしまはないやうに希望して居るんです。勿論研究する必要はあります。それは私が寫眞の構圖のために、此の十年間毎日北齊の繪を見て居るのと同じ事です。私は北齊の眞似をしようとはしない。唯、其の精神を捕へて、自分の寫眞に使はうとするのです。北齊の繪で私の敬服するのは、あの濃淡と、それから、とても歐洲の繪にないやうなスペースの用ひ方です。あれは實に見れば見る程能辯なスペースですな。ちやうどデビュッシイの音樂の能辯な休止と同じです。私はあのやうな能辯なスペースを自分の寫眞の上にも活かしたいと思つて始終研究して居ます。けれど、私は兎角失敗します。それはまつたく私が日本人で無いためでせう。日本人は實に藝術的だ。それからまた天性の俳優ですな。私は京都に居る間度々あの雁次郎を見ました。あの役者のやうな表情、あんな複雜な人に迫るやうな表情はとても西洋では見られません。それから舞

踊にしてもです。京都で見た小さなゲイシャの踊りにしても、何の雜作もなくステージ・ピクチュアを作つてます。それからあの手をかざして、首を少し曲げながら流し目をする時の全體のポーズにしてもまつたく長い間の洗練で完成されたものです。恐らく此の點で一番近いのは露西亞人でせう。けれどもあれは東洋の眞似だから日本のもの程純でありません。それにまた日本人は實に辛棒强い。今夜の講演にしろ、此の間慶應でした音樂の講演にしろ濟む迄誰一人席を立つ者がないんです。あんなに辛棒强い國民は、指導者さへよければ何でもきつと完成するにきまつて居ます』

彼は可成り興奮して頻りに身振りをしながらかう語つた。私は煙草に火を新しく附けてからまた訊ねた。

『デビュッシイの藝術でどこが一番偉いとお思ひです?』

『デビュッシイの偉いところは、先づ其の純粹な天分でせう。それはとても眞似手のないものです。デビュッシイの作品には不必要のものが少しもない。ただ、これといふ精髓ばかりが殘つて居ます。だから純粹に美しい。シュトラウスやワーグナーの作品には何でもかんでもあります。けれどもデビュッシイにはそれが無い。つまりちやうど北齊のやうな藝術です。休止一つでも非常な效果があるのです。而かもデビュッシイに最も驚嘆させられるのは、其の不必要なものを「如何に」棄て去るといふ事より「いつ」棄て去るかといふ事を直覺的に知つて居る點です。其の證據には「ロンド・ドゥ・プランタン」でも「海」でも聽けば直ぐわかります。さうして聽いたあとで、誰でも何かが頭の中に殘つて居る事をいつでも氣が注かずには居られない。たしかにデビュッシイの藝術は其の形式からいふと最高のものです。能がワーグナーの樂劇よりも純粹な形式から云つて高いものだといふ意味から云つて……』

彼はここで話題を變じた。

『さうさうコーサク・ヤマダを御存じですか?』

『ええ、山田君は今日のコンサートに來て居ました。先刻迄一しよに話して居たんで

す』

『さうでしたか。私はあの人の譜を見ましたが、矢張りまだ獨逸の影響を受けて居ると思ひます。あの胡蝶(バタフライ)のやうな日本の旋律にあの人が重苦しい獨逸の和聲を附けて居るのは贊成が出來ません。然し一體日本の音樂を西洋音樂に調和させようとするのが間違ひでせう。それもラヴェルやデビュッシイのやうな和聲を使ふのならまだいいがそれにしても私には感服が出來ませんなあ。勿論デビュッシイなどは東洋からいろいろの事を學んで居ます。これはいつか畫家のサージェントが話した事ですが、千九百年の巴里の博覽會の時、デビュッシイは――其の時分はまだ若かつたんですが――殆んど毎日其の中の瓜哇村に耳をおつ立てて其の東洋的の音樂を聽いて居たさうです』

アイクハイムは兩手を耳の兩側にあてて、兎の耳のやうな格好を示しながらかう云つた。

私は此れを聽いて、其の當時エリク・サティーも亦此の瓜哇村であの奇拔な樂想を養つた事を想像して、愉快に思つた。然し私は今度はラヴェルの事を訊いた。

『ラヴェルのトリオは餘程複雜なものださうですなあ?』

『大したもんです。あんなむづかしい、またあんな見事なトリオはありません』

『私はクォーテットの方は知つて居ますが、トリオの方はまだ譜が來ないので知らないんです』

『いや、クォーテットのやうなものぢやありません。あれはきれいだけれど、今度のトリオとはとても比較に成りませんな。何しろ傑作です』

『あなたは誰とおやりでした?』

『キラーといふチェリストとサム・チャールスといふピアニストとです。ボストン、シカゴ、スプリング・フィールドなどで演奏しました。亞米利加での初演奏でした。サム・チャールスはデビュッシイのインタープレターとして亞米利加第一です。あなたは

レッフラーの作を知つておいでですか？』

『譜で見るだけで聽いた事はありません』

『レッフラーはね、今の亞米利加で第一の作曲家です。あれの交響樂は實に天下無比です。ベートーヴェンと比べても遜色のないものです。私はボストンのオーケストラでずつとレッフラーと一しよに居ました。アルサス人には相違ないけれど、若い時から亞米利加に居るから、今ではもう亞米利加人です。尤も作品はデビュッシイやラヴェルとは違つた意味で佛蘭西的ですがな。今年フロンツァレイ・クォーテットの初めて演奏したあの人のクォーテットも實に素晴らしいものです。飛行家が戰場の空を飛んで、葬式の場所や古風な花園などを眺めて行くうちに嵐に逢ふ感じが出て居るのです。面白い構想ぢやありませんか？戰死した友人の飛行家の記念に作つたものなのです。レッフラーは實に大した技巧を持つて居る人ですよ。ヴァイオリニストとしては世界第一と云つてもいいくらゐの名人だから、ヴァイオリンのパートの書き方などは

見事なものです。それから歌にもいいのがあるし、オーボーとヴィオラとピアノの二つのラプソディーも大した曲です。「ペーガン・ポエム」もいい。それから「タンタジイルの死」も。但、ピアノに直すとまるで感じが出ませんが。さうさう去年レッフラーのクォーテットの初演された時に私のクォーテット――絃樂四重奏です――も初演されました』

『矢張りフロンツァレイにですか？』

『いや、バークシャー・クォーテットでした。若い人達なのでポリッシュされて居ないところはあるが、フロンツァレイよりヴォリュームに富んで居ます。あの「トリビューン」に居るクレービールが大變讃めて呉れました。近年の室樂の中での傑作だと云つて。ところがそれは實をいふと二十五年も前の作なのです。クナイゼルにやらせやうと思つたら複雜過ぎて居て出來ないと云つて居たのです。尤も第一樂章などは八分の十五といふ拍子で書いてあるんですからな』

『オルンシュタインはどうお思ひです?』
『マーヴェラスです。あれは天才ですな。それに一流のピアニストです。まだ二十二ぐらゐなのに作品が六十もあるんですからなあ』
『亞米利加の作曲家でレッフラーの外には誰が有望だとお思ひです?』
『さう、カール・エンゲルでせうな。まだ三十を越したばかりで樂譜屋に働いて居る男ですが、たしかに天才です。此の間作つたヴァイオリン・ソナタなどは大したものです。私は旅行に出掛ける前に其のソナタをピアニストのゲブハードと紐育で、チボーとバウアーに聽かせたら、二人共夢中に成つて居ました。いづれ方々で彈くでせう。エンゲルは佛蘭西で教育を受けた男で、佛蘭西語はもとより達者ですが、獨逸語も英語もラテン語も實にうまいもので、「ミュージカル・クォータリイ」などには英語で書くし、佛蘭西の雜誌には佛蘭西語で書くのです。大したリンギストです』
『都合の良い人ですなあ』

『どうも、一藝に秀でて居るものは、外の事をしても直きに上手に成るんですなあ。つまり才能が凡人以上なんだから何にでも向ければ向くのでせう。ワーグナーにしても、リストにしてもさうです。それからレッフラーは大作曲家で大ヴァイオリニストでおまけに一流の馬乘りで、一流の百姓だし、バデレフスキイは玉突きの名人で、到頭大統領に成つてしまつたぢやありませんか……』
然しさういふ彼自身にしてもさういふ傾向がないではないと私は思つた。
『さうです。凡人は結局駄目ですかなあ。ところで今ボストンのコンダクターは誰で?』
『今ですか? 今はピエル・モントー。背低くの見すぼらしい猶太人ですが、指揮はうまいものです。それに新しい曲の理解が中々あります。其の前はアンリ・ラボーでした』
ラボーは作曲もしますなあ?』

『しますとも。去年あの人の「マルーフ」をメトロポリタンで見て驚きました。あんな上手な音樂といふものは滅多にあるものぢやあない。殊に其の中のバレーときたら殆んど私は自分の耳が信じられないくらゐでした。奇妙なエフェクティヴな和聲で出來て居る東洋的なものなんですが、實に無類です。勿論ラボーは決して天才ぢやあないが、素晴らしい技巧家です。私は其れを見た翌晩ストラヴィンスキイの「ペトルーシュカ」にも感心したんだが、どうも「ペトルーシュカ」より私にはラボーの其のバレーの方がいいやうな氣がしました。デビュッシイの「ペレアス」以後での傑作でせう。勿論プチニの歌劇もうまいに相違ありません。プチニぐらゐ舞臺のための作曲の上手な人は無いと云つていい。其の代り舞臺から離して唯音樂として見れば實に淺薄なものです。でもあれが實際には效果があるのが不思議ぢやありませんか。然しラボーのはプチニのやうなものぢやないのです。もつと音樂としてずつと立派なものなのです。』

『近代的なのでせうか?』

『無論近代的ですが、ストラヴィンスキイのやうにアルトラ・モーダンではないですよ。然しほんたうに大した歌劇です。尤もコンダクターとしては、ラボーはとてもモントーなどにかなひません』

『ははあ、餘程いい歌劇だと見えますね。然し、「ペトルーシュカ」もいいですね?』

『無論いい、それから「火の鳥」も。然しストラヴィンスキイには少しまだ物足りないところがあります。どうです、さうは思ひませんか? ストラヴィンスキイの曲はですな、初めて聽くと誰でも吃驚する。さうして「ここに新しい天才が居る」と大聲で云ひたく成るけれど、二度目に成ると感激がすこし減つてかういふやうに成る。「なるほど、これか、ああ、あれは九度、あれは十三度の和音だな。うむ、あれはDのサスペンションか。そんなら何もさう仰天するには當らない。」ところで三度目に成ると「何だ、もう倦きた」と云ひたく成る。どうも私にはさうですがな』

『成程、私もストラヴィンスキイの「花火」ではさういふ經驗があります』

『「花火」? ああ、あれは淺薄なものです。「ペトルーシュカ」とは比較に成りません。あなたはダンディーのものを知つておいでですか?』

『すこしは知つて居ります』

『ダンディーの交響樂はいい。あれは無論ベートーヴェンに比べて差支へのないものです。けれどもダンディーはもう二十年程前の人ですなあ。デビュッシイは今日の我我のために語る人ですが』

『それは私も同感です。而かもあのヴァイオリン・ソナタなどはクラシカルなものですね。あの譜のタイトル・ページからしてさうぢやありませんか?』

『さうさうあれはいい。殊に「佛蘭西の音樂家クロード・デビュッシイの作」と書いて居るところが何とも云へない味ですなあ』

私は其の時、此の曲のデディケーションに a Emma-Claude Debussy (p. m.) とある中の p. m. の意味がわからないのを思ひ出して訊いて見た。

ところがアイクハイムにも其れが解らなかつた。そして彼は今迄其の知つて居る總べての佛蘭西人に此れの意味をたづねたけれど、誰も判然たる答への出來るものが無いといふ事を語つた。

氣が注いてみると時計は既に十時を過ぎて居た。そこで私は彼にこれからの旅程をたづねてから別れを告げやうとした。

『いつ迄東京においでのおつもりです?』

『火曜には熱海に寫眞を撮りに行きますが、金曜には宮内省の雅樂の演奏を聽く筈に成つて居るので、こつちへ歸つて來ます。それから一月の一日には亞米利加から十五に成る娘が來る事に成つて居ますから、それからは瓜哇から印度の方を四月頃迄旅行するつもりです。東京も寒いのとホテルの惡いのとで、さう長く居るとインスピレーションをスポイルされますからなあ。何しろ此のホテルのサーヴィスは論外です。折

角日本へ來て、こんなホテルに暮すのは馬鹿氣きつて居ます。それならボストンの自分の家に居る方が餘程いい。然し、四月にはまた日本へ歸つて來て六月迄滯在する豫定です」

「それならば、私のところに今作つて居る小さな音樂室が其の頃には出來上りますから是非一度いらしつていただきたいと思ひますが」

「さうですか、それは喜んでうかがひます。さうしてフォーレの第二ソナタを聽いていただきませう。あんな老人がどのくらゐ偉い曲の書けるかをね。あなたはピアノをお彈きですか？」

「いいえ、ただ鳴らすだけです」

「デビュッシイがお彈けですか？」

「どうして、とても滿足には彈けません」

「「葉蔭を洩るる鐘の音」や「幸福の島」はどうです？　良い曲ですなあ。妻の得意の

曲です」

「それでは、いづれ聽かしていただくのをたのしみにして居ります」

私達はここで彼と握手を交はしてホテルの外へ出た。そして私は思はず呟いた。

「亞米利加にもあんな人があるのかなあ！」

すると友人は云つた。

「兎に角すべて論理が立つて居ますね。讃めるのでも貶すのでも」

「あんな人が多勢居るんだから、オーケストラだつて向ふのはうまいわけだ。何しろ、實によくわけのわかる人ですね。あの年で。もう五十でせう。あんな人が多勢居るんだから亞米利加だつて大したもんだ」

「兎に角、ストラヴィンスキイが鼻につくやうに成つてみたいな。ああいふ人と話すと、事新しく外遊の必要を感じますね」

大正九年四月廿五日印刷
大正九年四月三十日發行

定價金貳圓

微笑と嘲笑
附奥

不許複製

著作兼發行者　東京府下大森山王二千五百十八番地　大田黑元雄
印刷者　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　倉谷鎭夫
印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

發行所　東京府下大森山王二千五百八十番地　音樂と文學社
發賣所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店

大田黑元雄氏著作音樂書目

バッハよりシェーンベルヒ　（三版近刊）
續バッハよりシェーンベルヒ
近代音樂精髓　（絕版）
印象と感想　（絕版）
歌劇大觀
洋樂夜話
續洋樂夜話　（改訂版近刊）
露西亞舞踊
水の上の音樂　第一譯著集
微笑と嘲笑　第二譯著集
音樂日記抄　（英京—一九一四年）
第二音樂日記抄　（東京、一九一六年—一九一九年）
名曲大觀　第一卷
卓上樂話　（近刊）

386
~~387~~

終